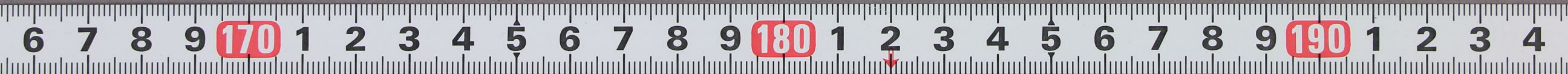


季寄
 註解
 改正月令博物箋
 七月部
 一

九





詩歌連俳
季寄註解

改正月令博物筌
秋之部

改正月令博物筌 九例

○此書ハ先ハ行儀目原先生述

作の歳時の増補して洞齋公羽三十

年前編輯諸先生の訂正を

乞て春之部夏之部既ふ世小流

布とくも艸稿駁雜ふして傳

寫の誤もあり且時務小後事

少なきはたへハ神夏ふ於る洛

東の新日吉四月の祭祀五月と

改められハ幡の安居頭今十二月

ふの行り其外歳事のご事又ハ

世俗のいふむ一々の内の嘉例

さざつる物も變る事多し

今般委く改正し口録と爲



処の諸家の校閲を経て板行を
 故に改正の二字と蒙らむ春夏
 の部も此度正し是又改正の
 二字と附を依て改正月令博物
 筌とつるもの究めて正しく誤は
 此昏の正しくなりとて言ひて
 詩哥非諧等給に故日記しゆん
 ○春夏の部の神社祭礼細字小
 昏等分れあれも秋冬の部に至
 ていさるべき祭礼又いせふりく聞
 へるハ皆大字小書と存ハ見
 易かりんが為なり
 ○巻毎の初小圓形の内小昏と
 ころ見易かりん為ふ設ゆまをく

七月部目録

△印ハ非諧の季とり物之

○養生の法。雨風の考。米の豊凶
 ○妙茶。季とり。祭。其外人家
 重宝のこゝ処々小教多あふ
 少く目録よこれとあるます

秋

○秋の旺る処。秋由未。発端ノ
 ○秋の異名并ニ註解 一丁

七月

卦 月支 調子 陰陽生 七丁
 並ニ註 七月異名並ニ註 二丁

立秋節

△立秋節 三丁 △處暑中 六丁

日令

此部ハ七月一ヶ月日の定り
 くる事支の定りることを記す

先天節

△先天節 七丁 △洗車雨 八丁

硯洗

△硯洗 八丁 △山北野煤拂 八丁

七日節供

△七日節供 七丁 △索餅 七丁

洒浪雨

△洒浪雨 七丁 △七夕 異名 七丁

△二星△星合△曬衣夕△巧夕△乞巧
 夕△星夕△星會△乞巧奠△犬飼星
 △男七夕△女七夕△七夕七娘△こり事
 △七箇池△百ヶ池△七巧針△占蛛絲

目七

日朔

△乳の糸△星の手向△庭の立琴△七夕ふ
借△水△舟△柁△梶の葉△星契△星
迎△年の渡り△妻むら舟△妻こ
一舟△七種舟△天の川。異名和名
△秋さう衣△紅葉のそー
△かさくぎのそー

○七夕之文 七丁 △七夕纏 十九丁

△京北野御手水 七丁 △池坊立花 十九丁

△本願寺菟花 七丁 △逆峯入 七丁

△京文珠會 七丁 △六道泰 七丁

△模賣△迎鐘 日十 △清水十日泰 七丁

△模買△迎火 七丁 △中元 七丁

△盂蘭盆 △盆會 △盆供 △施餓鬼 七丁

△壺祭 △聖天祭 △聖天棚 △天棚 七丁

△前尾草 △水くひ中 七丁

△生身玉 △荷の飯 七丁

△解夏 夏各納 七丁

△安居頭 七丁 △三井寺女詣 七丁

△水灯會 七丁 △施火 △大文字火 △妙法火 七丁

△舟形火 七丁 △送火 七丁

△能戸祭 七丁 △経木流 七丁

△松崎題目踊 七丁 △新綿 七丁

△つと入 七丁 △鷹峙出 七丁

△京御灵御出 七丁 △宗祇忌 七丁

△文覚上人忌 七丁 △諸方地藏祭 七丁

△愛宕火 七丁 △鷹山別 七丁

△信州御射山穂家作御神事 七丁

月令 此部ふ八日のさごまうらぶら七
月一ヶ月のまらふら

△撰待 △門茶 七丁 △燈籠 △高燈籠 △きりこ燈籠 七丁

△きりこ△舟まら△花まら△折
△燈籠△廻りまら△軒のまら 七丁

△踊 七丁 △花火 七丁

日七十

日七十

日六十

日五十

日三十

日八

△秋の扇 あきあき △扇おく △團あそび △團あそび △相撲節會あそび 七ノ

△京六斎念佛きやうろくさいねんぶつ 七ノ △相撲節會あそび 七ノ

△こころ使 △さし角力 △ときま △辻つじ △時令

△この部ハ七月一ヶ月時侯
ふりくるくはあつたるを

△初秋 七ノ △残暑 あとのあつた 七ノ 七ノ 七ノ

△餞暑 七ノ △稻妻 七ノ

△秋の初風 七ノ △秋涼 あきすず △新あたら 七ノ 七ノ

△初嵐 あはれ △暴風 七ノ △冷ひや 七ノ

△二百十日 七ノ

△草木 △秋 あき △秋 あき △秋 あき 七ノ 七ノ 七ノ

△楓 あき △青あお 七ノ △楸 七ノ

△柞 七ノ △檀 七ノ

△櫨 七ノ △木槿 七ノ

△朝負 七ノ △秋海棠 七ノ

△玄及 七ノ △桔梗 七ノ

△沢桔梗 七ノ △蘭 七ノ

△建蘭 七ノ △女郎花 七ノ

△茶の花 七ノ △仙翁花 七ノ

△観音草 七ノ △翁草 七ノ

△弟切草 七ノ △益母草 七ノ

△鳳仙花 七ノ △旋覆花 七ノ

△野菊 七ノ △やい花 七ノ

△曼珠沙花 七ノ △常山花 七ノ

△頰桐 七ノ △蓖麻子 七ノ

△洗柿 七ノ △茗荷花 七ノ

△爵金花 七ノ △薏苡 七ノ

△蒲萄 七ノ △紫葛 七ノ

△桃子 七ノ △木瓜実 七ノ

△槐花 七 〇
△蓮子飛 七 〇

△刀豆 七 〇
△夕負実 七 〇

△青瓢箪 七 〇
△西瓜 七 〇

△のこく 七 〇
△束 七 〇

△粟の穂 七 〇
△稻葉の雲 七 〇

△稻の花 七 〇
△早稻 七 〇

△室の早稻 七 〇

△生類 七 〇
七月の生ものと集むるもの(五)この
と八月又九月にも用ゆる物

△初鷹 七 〇
△小たり狩 七 〇

△鳥屋勝 七 〇
△荒鷲 七 〇

△秋の蛙 七 〇
△秋の鳩吹 七 〇

△秋の蚊 七 〇
△秋の螢 七 〇

△秋の蟬 七 〇
△蛸螻 七 〇

△第蛸 七 〇
△寒蟬 七 〇

△田畑虫送 七 〇
△蜻蛉 七 〇

△赤卒 七 〇
△赤んぼ 七 〇

△虫撰 七 〇
△虫合 七 〇

△虫尽 七 〇
△虫籠 七 〇

△虫賣 七 〇
△蟲 七 〇

△月鈴虫 七 〇
△松虫 七 〇

△蟋蟀 七 〇
△促織 七 〇

△蚣蝓 七 〇
△龜馬 七 〇

△稻虫 七 〇
△阜冬蝨 七 〇

△樵虫 七 〇
△蓑虫鳴 七 〇

△馬追虫 七 〇
△稻つこ 七 〇

△藻鳴虫 七 〇
△蚯蚓鳴 七 〇

△蟪蛄 七 〇
△常山虫 七 〇

必用

七月一月。養生。天气。衣服の式等。要用のしほり。

樂事

破軍向方

時刻

方角

天气占候

衣服の式

養生

女の衣服

飲食

七月一ヶ月の食物一切
料理こん立等としりす

燒米

切麥
あつ麦
あつ麦

七月料理献立

七料ノ
二丁

月令博物荃秋之部發端

礼記の註小曰秋と小
陽と守其氣収成



秋由来

漢書律曆志小曰秋ハ秋ハ
物斂斂して成熟

とる也といふ事斂斂といふ事
といふ義なり○和語小あれたと訓
どる事ハ陽氣去ると天色さえあ
らうなりといふことなり又一説ハ
鮮といふこと草木の葉いあ
たり木の実は色づくゆへといふ
○方と西といふ事ハ礼記ハ
秋を西郊ふむといふ事なり易通

統圖ニ日西方の白道をゆく
これと西陸と云ふと其えり
和歌小秋の方角を西と云ふ
る例ハ古今集藤原勝臣
ノ歌

哥ハヤバと云て此のころハ
西ノ秋のころ免るるれ
と云ふり ○精ハ白虎と淮南

子ハ西方ハ金なりその獸ハ白虎
とあり ○人の義なりと淮南子
小秋と矩と寸矩ハ万物とたどと
ゆ多り義ハ成り成り方は

て物の角の角のひらいて人ハ於て
ハ義ののる心あり ○天ハ昊天と
元帝纂要ハ天と昊天と云と有

て註ハ昊天と惑なり万物の彫零と
そとるるをみたり ○天ハ秋
とあり ○卦ハ兌ハ易ハ兌ハ正秋

也とあるふり ○氣ハ小陰とハ
目の上 ○臟ハ肺とハ人身の肺を

五臟の花蓋とて上居ハ金ノ属
と云故小秋ハ配當と云ふ 医各
小見と云ふ ○色ハ白とハ礼記ハ其

帝ハ少皞とありて註ハ少皞ハ白精の
君金天氏と見と云ふ ○味ハ辛

とハ礼記ハ其味ハ辛ハ其臭ハ腥
と有て註ハ辛腥ハ金ノ属
と云と見と云ふ

秋異名
○白藏 ○素商 ○秋季
○金德 ○短晷 ○商應

○五政 ○木落 ○陰中 ○金勁
○西灝 ○金行 ○士感 ○菊時

○蓐秋 ○爽籟 ○少皞 ○収成
○金商 ○朗景 ○明景

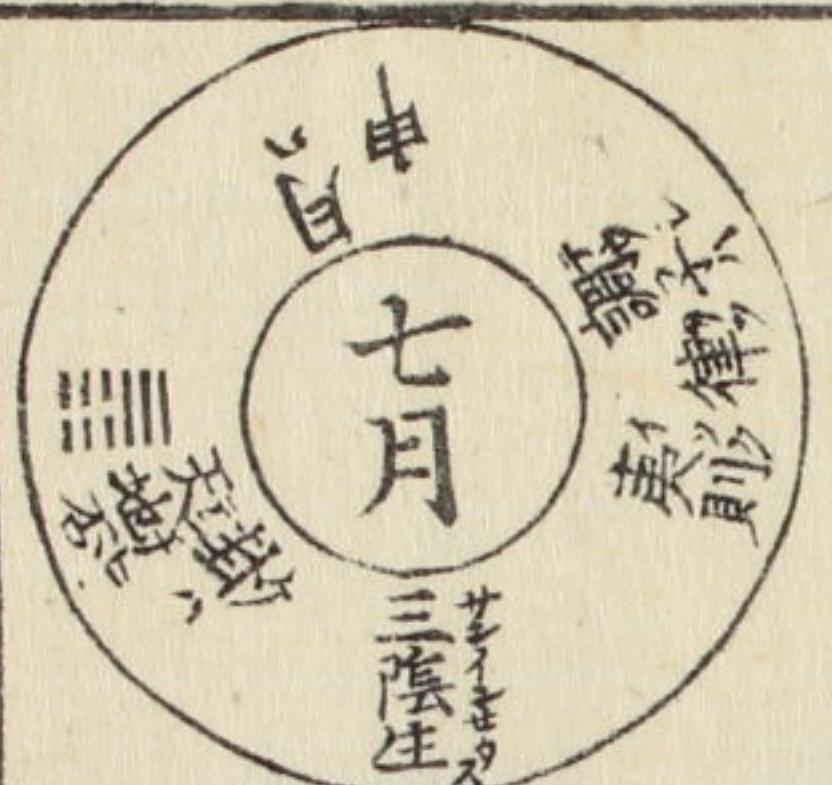
異名註
白藏ハ秋の白の金
色藏ハ秋の雨雅出

○素商云ハ素ハ白ノ商ハ秋の律
あり ○素秋ハ此理ハ元帝纂要出
○秋季ハ秋の盛
徳在金ハ月令ハあり ○短晷ハ日

夕日陰く。○商應の潘安仁が詩に出
 ○五政の管子出一日博塞と禁と二
 日五兵の刃と見る事あり三日旅
 農と填と聚收と趨とよ四日鉄
 たりと補ひ折るが塞げ五日塙垣
 を修め門閭を周ふせよ已上五政
 ○木落へ木葉落るく 楚辞出 ○陰
 中へ前漢各律曆志有 ○金勁 吳淑
 が秋賦に金氣方勁とあり ○西顛
 へ前漢各郊祀志出あり ○金行の徳
 さう小行とくさうとく ○士感の犬
 夫秋ふ感どとく 諺ふとく ○
 菊時へ時とささり ○蓐収のあ
 つまら 収るあり ○爽籟のさるるな
 る秋の声く ○少皞の秋の帝ふ配す
 已上元帝纂要ふあり ○收成のた
 らさるく ○金商の金は秋の徳商の秋
 あり ○朗景 ○明景も秋の景色
 ○右の外秋三月小渡る季の物
 の別ふ三秋の部あり

七月之部

△此印の分是を俳諧
 の季寄ふ用ひ來る物



三陰生とて秋
 陰の初るる故
 孟秋小於天
 地初るて肅すと
 心身と
 身と
 月と

○律を夷則とくは夷の傷る万物
 始て傷る天刑とくは前漢各出
 ○卦の天地否とくは夏の三陽
 上ふあり秋の三陰下ふあり象

七月 異名

△孟秋 礼記出 △上秋 韻府出
 △肇秋 纂要 △首秋 韻府

△新秋 韻府 △早秋 同 △蘭秋 事物異
 △開秋 同 △蘭景 同 △相月 △孟
 商同 △夷則月 同 △湘月 留青朱珍
 △蘭月 同 △相秋 同 △秋初 同 △商
 節 韻府 △爽節 同 流火 同 △初
 秋 纂要 △盆秋 △涼月 同 各二出

和△文月 與義抄 △六月 同 名月 拙藏抄 七月 莫傳抄

△おもむき月 藏玉 七夕月 同 おもむき月 同 ありて月 莫傳抄

異名註 △孟秋の孟の字と云 字よりゆへ△上秋の三秋

の中とて七月の上たる月より

△撃秋の撃はくもく義あり

△蘭秋 楚辭出 秋蘭と紐て佩と

△開秋の開はひらくと云義とて

△蘭景これも楚辭の秋景の故

△首秋の首はくもく義あり

△孟商孟の初の心商の秋の義

△湘月これも楚辭の此月湘君と

△美則月夷則の律の名に只註あり

△盆秋の此月孟蘭盆會と身ゆへ

△涼月の礼記月令小孟秋の月涼

風至るといふより名づく

和註 文月とて七夕の借とて色

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

ひきき月といふと累とて文月とも

七夕月のころまらるる

公 ふるひき月
七夕のまらるるのころまらるる
かきかへるふるひき月

莫傳 穰初月

扇玉 とまきく月
扇玉のころまらるるのころまらるる

蔵玉 とまきく月

七夕のまらるるのころまらるる
名とまきく月

立秋 節の名〇七十二候〇草木七十二候〇
昼夜長短〇日の出入等左の記と



〇涼風至此天地の仁氣散すと殺伐の氣ふるはりの葵もかへるて赤くはるる

〇白露降まら秋の陰氣夏の陽氣おれと氣候まらるるは礼記の註を見えり

〇王薺花と催とく瓜首と楡と云〇寒蟬鳴る暑中お生るる蟬の聲は憂とるる

〇紫微月と侵とる紫微星と

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

〇初秋の秋立て三五日おるる

夫木 立秋 定家

夕べの秋の夕涼みあそび
涼しくひく風のあそび

夫木

後善哉院

夕涼みあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

龜山 立秋朝

御製

夕涼みの夕涼みあそびあそび
ひとよふあそびあそびあそび

千首 立秋風

為尹

夕涼みの夕涼みあそびあそび
いつくさあそびあそびあそび

同 立秋曉

師継

夕涼みの夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

千載 社頭立秋

重政

秋山の秋の夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

詞 △夕の秋の夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

入る夕の夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

△秋の夕の夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

連 夕涼みの夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

秋風の夕涼みの夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

俳 夕涼みの夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

漢音の夕涼みの夕涼みあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

詩 立秋五字對句

同上

好雨天邊落 金井落梧桐

新秋水掬清 涼生一枕風

詩 立秋七字對句

秋暑困人仍御扇 爽氣浮

晚風生竹却添衣 入清商

迎秋日色簷前見 白雲

入夜鐘声竹外聞 夜來秋

詩 立秋詞

明龔最

烟雲黯淡仲宣樓 荏苒年花

逝水流 色モ雲ノ色モウツサ

カラニルモロコシノ仲宣ト云タ人が質

客ト成ニサカモリノタソノタカトノヲ仲

宣ガ楼トイフ故事ナリ○荏苒トウ

アリユク月日ハテタドエクニツナガレ

ヤナル白雲郷山千里外 滿

城風雨又新秋 一テ故郷ヲ千里

モヘタテ、タビノラニブラツイテ井ルニ此

外ノ城外一面ニモノスゴイアノカゼガオ

コルトオモハコトモ又

コトモニナツタノジヤ

立秋 故事 載 唐ニ女童 柳ノ葉

ノカタチヲナシ今日カガレニイタク也

日本ニテ柳ヲカケ 菖蒲ヲ 髪ニニ

クニヒトシ 蔓草録ニ出クリ

○日本ニモコノ事 往昔アリトゾ

立秋 一葉 知秋 各言故事ニ出

故事 一葉トハ桐ノことなり

△桐の二葉△一葉散△桐の葉落

右ノ事モれハカドトナリ

○淮南子ニ曰 梧桐一葉落天下

知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

○程明道ノ詩ニモ

詩 井梧一葉報秋聲トモ作レリ

○道甲辰日 曰 梧桐立秋ノ日一

葉先ツ落トモイヘリ

○夫木 國夏

つらつらと細林風ふやまの

園辺にけしきをあらわん

連 本はるより月の結立一葉

風中をそとるく秋の一葉

能 あまの文隅に居す相一葉

狂 清き風をこもせやうの月ハ

風の一葉のらりしあるり 貞徳

立秋 一葉舟 小補 龍會ニ黄帝

故事 浮葉ヲ見テ舟ヲ

ツクルト云故事トロニルス淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリトイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

○廣沢の長考々七夕のちよ
天の川星はとやしの妹風よ
らるや一葉のつらむくみ

○非 坊の家と遠くをなす秋直正

立秋 柳散 此ゴロチリソムル故
柳桐ノ類ハ早クチ

リ初ルナリ。事文類聚ニ晋ノ顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望

秋先零ト云フ語ヲイダセリ
コノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋 一葉衣 是ハロノ一葉ノ故
事ニ一重ノ衣ヲ

取アハタルモノナリ

○右一葉の事よりつるも立秋
一日ふかざりつるにもあはれ初
秋の事によとも然るべし

立秋 天氣

立秋よりほくきて東
北乃風をそむゆ

稲々実入ら守。又蒸あけのれん
秋収とぬーつらば。夜ひや

かれ大風な。これを夜北と
つらかり。昼あけく。残暑つよ

夜をれてとこ。夜北吹や
ほひて日和よく。虫けさく。稻

小大まのよう。南風にくわめ
あけさの雨ふる。秋季はくも

おや。多く出ても風出ざ
まのあまふさ。朝どら

ひがれ方。赫々とわくやけ
まの陽気のことんさる。南

へ赤く。はれはひて日和は
○朝天雲のやけふ。二三日の

らら。小雨ふる。夕やけ北へま
れ。むより。南へま。雨

をり。やく。道も又雨なり
○朝の虹。西へ見。三日の内

雨多き暮のめどひかしの
晴ふる○胡夕ともいぬの

真直ふるかくま棒虹と俗
小つかさく大風ふる月のく

立たつ雲うん氣き 自雲東南の方より出
て空はきき出さへ大

風ふるこの風を伊勢東風と云
○西の方より東のかくへ行く

西南西北より小日和ひよりと云
雲天の川とささげハ風雨あらく

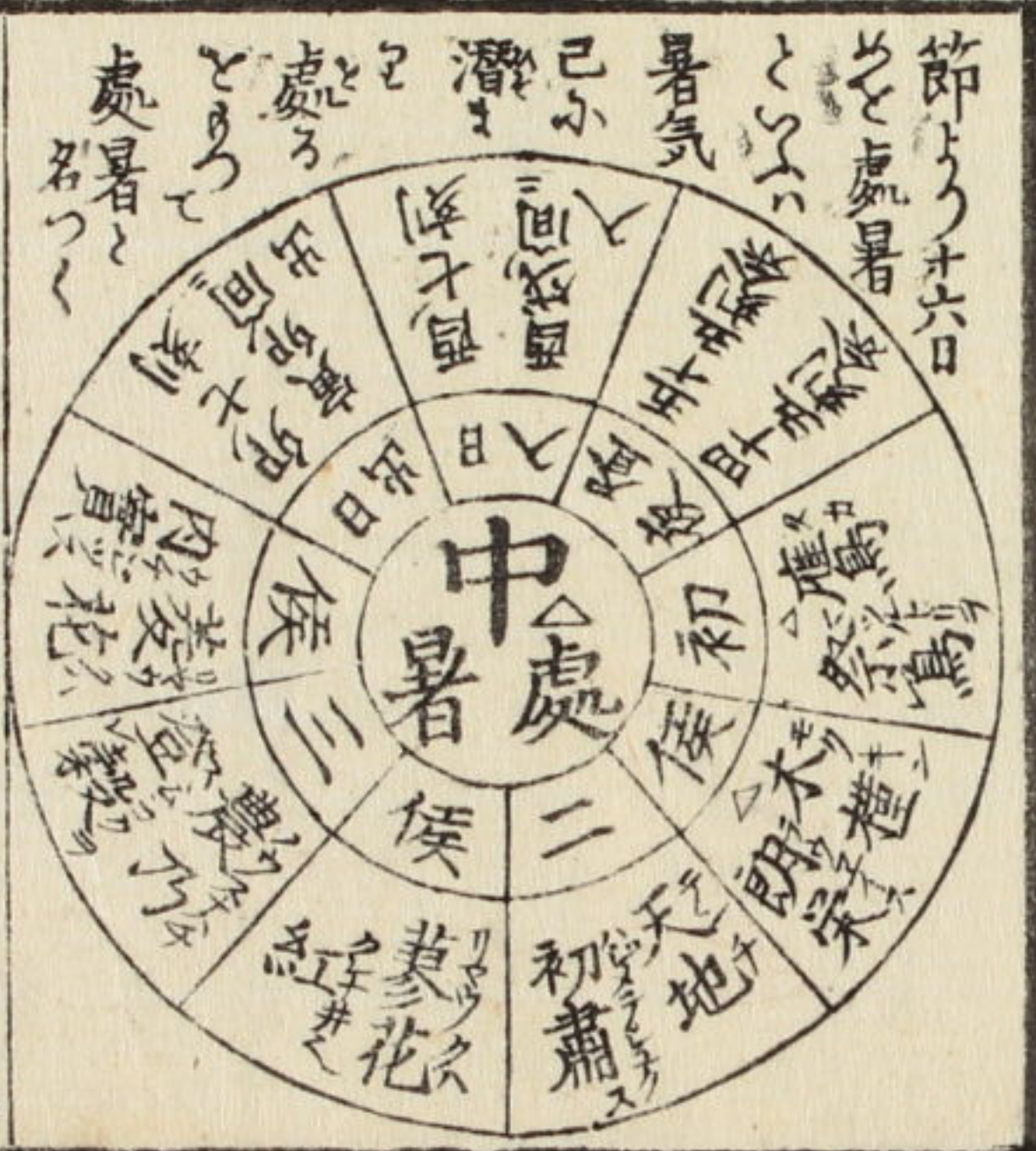
⑤千首 初秋雲 爲尹
今ういさく対あさきむれも

⑥非 足巻と鶴より杖のそ季吟
あれのきいのききせれを

立たつ妙みょう藥やく 立秋の日西ふりして
赤小豆十七粒或十四粒

を井花水にて吞ハ秋中赤白痢
病とふる小事な

處暑 中名ハ七十二候。草木七十二候
○昼夜長短。日の出入左記す



鷹鳥と祭るハ殺伐の秋氣を得
て鳥と捕り沢の四面に置

祭るハ魚と祭るハ是と鳥と祭
るハ魚と祭るハ是と鳥と祭

木槿朗栄と云ハひびの花咲
を催して葉落るもあける

天地始肅ハ天地の氣秋
ふるてそとてあさきむれも

蓼花紅ハたでの花さく也
農乃登穀ハ此月農人五穀

の初穂と天子へそめ奉る是
小よりて天子新と嘗むと礼記

見えたり本朝新嘗會も是ふより
○菱花内実と云ふは実をふるなり

日令

此部より七月一ヶ月日の定り
なること支の定りたることを記す

朔 今日風雨あれぬ米の價貴し
日 ○南風あれぬ米粟大ふし

先天節 今日聖祖降誕の日
依て名づく 事物異名集出

朔 江 ○本所羅漢寺五百羅漢
戸 供養施餓鬼あり

朔 信 ○下諏訪明神秋の宮祭り
濃 委くは年中行司細目小出す

三 京 ○鳥羽院御證月御忌今日
都 竹田村安樂壽院にて行り

四 伊 ○栢流一の神事。栢占も云
勢 昔ハ土貢島より栢と捧

げり神事ハ風の宮にて行り
る栢の浮んで流る時ハその
年豊年と栢のあつとくると
さハ凶年と云ふなり

○方 ちふくさけり方の長かへ
かゝるそまのむひろとまを寂阿

五 京 ○建仁寺開山忌。講ハ榮
都 西千光國師葉上坊僧正と云

六 ○高臺寺施餓鬼什物出。四条
二条河原七夕手向の笹流し

六 洗車雨 六日小降る雨とつら
七夕の車と洗ふと云

事 ありと云 歳時雜記見たり
又日本歳時記ふり委くある事

六 硯洗 △机洗。京師の鬼女令
日 硯机と洗ひ清らす

の葉の露ととり梶の葉と七夕
の手向の詩哥と尺目と供とる

六 山 北野煤拂 北野天神の社今
日 城内陣小納めあり

神室と外へ出て虫干と其間
内外の陣の煤とるひとるす

○諸谷北野御手水六日とみ
煤とるひ七日とみとる誤り

七〇西南の風と金風と云ふ米日実少し〇雨ふれば八月小洪水あり但し小麥麻豆のふ價やととととせ

七日節供 今日内膳司より當日の節の供御

を献じとて供御ハ毎日奉る物なれども一年の内節々々奉るを節供といふなり

〇七の少陽不變の數あり故に當七日の本朝五節向の一日て祝ふこと日本紀江次第公事

根源等其外諸君亦出で歴然する式日あり俗二星の祭りかてちて公事の式日とてを忘るるふ似たり

索餅 昔高辛氏の小子今日死す天鬼とまり人を

ちやまき常に麥餅と好むこれかよてこの麥餅と供じて瘡疾

とすまぬるやうに十節紀の出たり今日の節向の瘡と除く為也と

つり此ゆへや今日親族索麵とれり又索麵と食ふなり

索餅と云索麵のことあり麦索ともつり風俗考に出り

生花式 撫子桔梗槿萩葛尾花と云ふ

七 洒淚雨 七夕の雨と云ふ牽牛と織女と別とせ

悲しとてかみごととてをその雨ありたり唐土にてぬるくといふ

ふりたりたりと云ふ事文類聚天中記等小出たり

七 七夕 △二星 △星合 △曝衣 △巧女 △乞願夕 △星々 △聖會 △乞巧奠

△勇七夕異名 牽牛 星経 河鼓 亦雅 牛郎子平大全 牛星 晋公淡録

同和名 △彦星 和名抄 △犬飼星 月

牛ひく月 歌林抄 △男七女

△七夕異名 織女星 天孫 柳文

星娥 詩学大成 天城 宋詩選

天媛 同上 △女七女

同和名 なるつづり 古今集 △こりこり

○七夕七姫とくひ

△朝貞姫 △梶の葉姫 △百子姫

△薫物姫 △さざ姫 △秋露姫

△糸織姫 已上を七夕乃七姫と

くひさり ちの草に出る

○又七夕七姫の一説は 槿姫 梶

の葉姫 秋天姫 琴寄姫 灯姫

○糸織姫 篠虫姫 已上神中集の説

○證哥ハ名数和哥選とくひる昏

不出るゆへ畧之右名数和哥選ハ云

と多くあつた哥のこゝ後とハ

絵ふあつたよきとらるるに秘

受口傳てのとも故初学の人を

見て大方便りふあり昏なり

○七夕祭と乞巧奠といふ乞巧の

たらしとよそ女の手とこの器用

かきりまうにむいひの事と奠

いまつりともむいひあり日本とい

天平勝宝七年小禁裏にて初

て行る先御殿の前小白木の几

と立て立琴とて十三絃の箏と

弓と律の調子小合して柱とを

瓜菓の類とさく草のちり五

色の糸とちりつねれたらぬ水と

たつて二星の影とちり香花

ともさく入祭らるる江家

次第にも委しく記されり

○唐土にも此夕の婦人ありまて

五銖の糸と以て星の影むいひ

て七夕の針のこゝろとて一庭よ

瓜とちりものとちりて巧とを祈る

小蜘蛛が糸とちりへちりさりの

上とさるるとちりて糸むいひの

人ちりとするよ 新楚歳時記見

○今世今日見女子竹の枝小短尺と

ほろい和哥と手向まのひはて和
國の風え竹の竿糸とくめて祈る意

とり妻 逢ふことのまじり
名づるをも又万葉の

やうその神の供ひよりまじり
人まうれりる若んとあつて入丸

又灯火姫ともいふまじり 證哥名
教和哥撰ふ出さる

○故事詩哥次ふかづく 出守尚
又天の川の川まをいさく小星の

あつまりしるまけ七夕の由來
其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又い銀河抄
等ふ出寸たりりるまじり

七箇池 △百箇池ともいふ
盤水とてまて星の

影をうめをいふ
影をうめをいふ

新古今 長家
まじりるまじりまじり

やい合の教もやれやせん

夫木 右京大夫
あつちかニツたりの物くつ

たついのあふりるまじり
排 星合の豊あや妹脊山 因元

乞巧針 婦人七孔の針小色々
の糸をまじりて七

タまたいりるまじり
千五百番哥合

あひうそむねの糸のまじり
活ひくまじりるまじり

占蛛絲 婦人瓜 茄子等と供へ
祭りて次日早瓜の上

蜘蛛糸といふまじり
と得たりるまじり

願の絲 五色の糸と竹の糸
かあて手向るまじり

詩 願絲七字對句 詩礎

虚無天上支機石 穿針時
昔張寶ト云人かイカタニツテ天ノ

川ハイテ言タタタタタタタタタ
まじりるまじりるまじりるまじり

信有人間乞巧絲

願絲綵

人間世界テヨロヒ子セビノイニハリテ
ヲシテ婦人がオモヒクニキヨウニナリ
タイト思フハニニ今モモルトシヤ

チカイノイガ
スチカヒニニエル

星手向

燈火其外何こと
今日星小供する物と云

夫木

常盤井入道

向あのおれをこゝろの向して
庭にかゝる秋のとりい

庭の立琴

夫木七夕のあふ
夜はたふをく琴の

あふにむくいさかみのいと 寂蓮
能立琴やあはまけり東は菊乙

七夕不借

惣じて七夕不供する物
をわすといふ中にも

いそぐれ衣をかきまてて是
とも手向一なり

後撰 七夕つめふりともいふ 慈圓
七夕つめふりともいふ

水掛草

貞徳の説より水影
草は多くの七夕

とありの水掛草も 稻のこゝろ
稻い水影のうつり月の故水影
草と号く尚又盆の處ふも記と

延文百首

賢俊

七夕乃結ふ契りハあふの川
あふをまの流もりし

梶の葉

七夕ふハ七枚の梶乃
葉小手向の歌とか

五色の糸にてまてて屋の上
小あひそぐものさるは中院通
茂公の御詠より 漢雲同巻出

夫木

入道前大政大臣

かきけり梶の七ふふもふこと
ねあふりりる秋のゆへくれ

新古今 七夕のともる秋の梶乃ふふ
いく秋々つあのおつさ 俊成

連梶とよりまはあふるあは泉紙

非梶の糸やあはまわくまをり移水

狂梶のゆを船をまの揮きと
星のいもをみ満やまをらん 魯石

○一説不掘をそのく楮を紙を造る木の葉小舟とかくたり

星契 牽牛と織女と牽牛と今宵の逢瀬と契約と心く

△草庵 竹の中も吹く風と 頭阿 勢りとしたのむ星合のそく

星迎 織女牽牛とまらむくる夜と心さる

年の渡 一年一度天の川と渡ると牛女の

逢ふとゆへはわたり乃とてこしく哥にもよあり

△続拾 多流いらるる隆康

妻迎舟 織女牽牛とひまふ出る舟と心さる

△白川百首 頭朝

△非 一系やまかたと逢へ舟是等

妻に船 牽牛乃葉とて来る舟といふころる

△非 日月多るぬる舟のそ七夕如春

○星の契より此処そい哥の詞

七種の舟 草花とて舟とかぞ七種と祭るさる

○秋 あとく 尾花 葛 女郎花

△秋さる衣 彦星の着て日

△夫七夕のいんをこまるとる衣の

天河 異名 銀漢 韻府 天漢 同 星河 詩学 大成 明河 古文

△天潢 梁何遜詩 銀潢 雞跖集

△和名 阿まの川 古今あまのかぐり日 やと川 璽玉星のやとくり 四季物語

○新勅

後二条院

ふあらし川流るる天乃川

あかてま川原の秋の夕暮

○連 波とあまの川宗祇

○俳 七つ小川の流るれつ天の河桂林

○むす 紫々として細くしての河玷洲

○家 中のとらえて娘一娘の起波

○浮 中の芬流をやまれば半雪

○狂 きくくくはき浪りつと天の河

玉のさくらさほり合の定 紫若

○詩 銀河詞

杜甫

○常時 任顯晦秋至最分明

○云 モノハツ子二見えタリ見えナシタリシテ

○モ 氣ノツカヌモノシヤカアキニナルトキツウ

○ア キラカニ見エル 縦被微雲掩終能永

○夜 清カノアノカハガムラ雲ニオホハレ

○ト 見エル 會星動雙闕伴月落

○邊 城ノノアノ川ガホレノヒカリヲ

○ナ リ月カゲニツレテハ辺鄙 牛女年々

ノ地ニモ見エワタルトス

渡河曾風浪生 年ヲ天川ヲワタレ下界

川トチカフニニ風ヤナミノオコルコトハアルニ

紅葉の橋

○次ニ註あり

頓阿

今日ハよも雨ふさうしてこれ河
くれる升々るるさやまらん

烏鵲の橋

○織女ハ天帝

の女牽牛と夫とて後機を

みろく瓜ねこころゆへ天帝怒

つて其中とさけ河をるるそく

住しむ七夕一度會事とゆらす

鳥鵲この橋をかりて織女を

越すしつらとつらりこころをん

とてかゝれたこの橋はつらうして紅

涙と落すこれふよらして紅葉の

橋ももよこれふ俗説として

信用をふたすすとて不博物

荃小弁とのかきだるわが

とれ種類たり

① 夫木

俊成

七夕のきえぬ切草を流しとや
こひねりしふるかさねのほし

② 雨後 かくれたるを世の橋もを基
非 かなど

七夕の歌詩連俳 いかづく
いどうす

③ 六百番奇合 家隆

家あふれ庭のさしひらつとえぬ
よや更ぬらん星合のそと

夫木 為家

君とせいの世もかほしあはれその
かこふる川と星合のそと

永久百首 七夕後朝 兼昌

朔風川波さりけ一夜つら
そぬゆらふもまよふへく

家集 海路七夕 経信

星合の彩風うらまふかの海も
天の川流のこらちととれ

新續古 待七夕 洞院攝政前左大臣

天の糸とくまの河のよこしり

あはれあふと流糸くせなん

續古 七夕別 家隆

天の川あつ川さやまの鳴りさよ
まこたれしはし流流まらさ

續千 閏月七夕 前中納言定房

あつあそねほららさの敷そり
こよひもさそせ天の川ふの

白川七首 二星適逢 俊成

七夕の糸流はさるも遠くし
なれしとやふしとさるも

奇合 閑思七夕 貞継

八重津まゆの彩端とくねかて
あつ合のさそを流らつとさ

白川 七夕契久 御製

七夕の天のね衣いそかてそま
はらぬやまふのねりあつん

④ あまよふ年ふ一夜の流り。まれ
あつ中。さのこさる。秋の一夜

。あつとら。遠流。たえぬあつり。
七夕の花れは。さのあ。庭の翠

天ハ早合の是の初合の是の初秋
 の是の夕つく夜○月のは舟風ハ七
 夕の神吹くを雨ハ七夕の流の魚
 ○天の河あまのつとあふ瀬さつじ
 雲ハその夜○雲の海ハ路 年ハ
 年ハそのつと○そのふまはつり○年ハ
 初合り天河ハそのつとあふ瀬○八十
 瀬○沙瀬ふむ○河瀬○河長○河と
 舟ハはまむ久舟○紅糸の舟○か
 へその舟○天の川舟○やその舟舟
 ○月のは舟 橋ハ紅糸の橋○か
 その橋○はもの玉ハ 夜ハみどり夜
 梳ハ天の河系れあまのつと 床ハあふ瀬
 の糸○玉麻○雲うらつとあふ 衣ハか
 せり衣○天の舟夜○秋さう夜○
 つやりの夜○雲の夜 糸ハ糸のつと
 ○竹の葉あつと糸○七夕のつと○七
 夕の舟のつと 槌の葉ハ 槌ふかくあ
 のと夕ハ雲流といそく○夕はく夜
 雲ハ 雲るるるそそ○流ぬ○粒まこりよ

あ

はのさうとハ七夕の初合の是の初と
 て七夕舟のつとあふ瀬さつじ

ふ

ふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふ

た

たのつとあふ瀬さつじ

天

天の川舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

う

うううううううううううううう

さ

ささささささささささささささ

ふ

ふふふふふふふふふふふふふふ

も

もももももももももももももも

う

うううううううううううううう

七

七七七七七七七七七七七七七七

ま

まままままままままままままま

む

むむむむむむむむむむむむむむ

連

連々々々々々々々々々々々々々々々々々

夕

夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕夕

行

行行行行行行行行行行行行行行

宗

宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗宗

心

心心心心心心心心心心心心心心

敬

敬敬敬敬敬敬敬敬敬敬敬敬敬敬

宗牧
 能七夕かきひらと結合好芭蕉
 静や九々の上りての川 晋子
 及びぬい古あて海より星糸 十ア
 浮巻のうきさきりや女七夕 才磨
 文切や花世小流るる天の川 露橋
 胡空り来りて星の別ふ 二柳
 幾今命の早き後世はあきら 立圃
 星合のかわぬきや飯と汁 移竹
 美似し秋挽の七葉やまおろし 貞佐
 狂 命守りててを果あふ七夕は
 ひるの川流のたれ川は 雄長老
 七夕のさるしと衣あかすれと
 かいま守終ふわくくせしよ 由縁母

詩 七夕五字對句

同上

卷幔天河入

故鄉臨桂水

開窓月露微

今夜眺星河

詩 七夕七字對句

詩礎

月渡天河光轉湿

懷良霄

鵲驚秋樹葉頻飛

銀漢回

當簷半落天河水

織女星

遠徑全低月樹枝

笑牽牛

詩 七夕詞

王建

銀燭秋光冷畫屏 輕羅小扇

撲流螢 秋光画ノカキタベウ

牽牛織女星 夕ノカケハレノヨルノ

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコニ子

詩 全

明 馮琦

天空露落夜如何漫道雙

星已渡河雲がハレヤカニツユモオリ

思フニ大カタ今コロハニツノホシガステニ

見説人間方恤緯可知天上

不停梭ケニサハカケタムケノ系

ハオリヒメガ梭ヲヤスメズニ

詩 仝 唐 祖咏

閨女求天女更闌意味闌

ムスメタチがオリヒメニ子カヒラカケテセタ

ヤウニモ 玉庭開粉席羅袖捧

銀盤タニツリノ儀式ヲカザリウスキ

又ノソデニシロカ子ノタラヒラ 向月穿

針易臨風整線難ハリノミ、

線トモニセタ 不知誰得巧今且

試尋看コトヲ尋ルノ事

七夕手向之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭

上願絲多ヨクク思フテミレバワカ

ニ子ガヒラカケテテキニ十ヲフトオモフ

オホイ

二星適逢未叙別緒依々之

恨五夜將明頗驚涼風颯

颯之聲ニツノホシガタニサカニヲフテ

カレテレキリニスバカセガフイテクルコ

ニオドロキ

露應別波珠空落雲云是

残粧髻未成セタノヨノアカシノユホ

玉がハレク落ルヤウミエユアケノ雲ハオ

七 妙藥妙術

房事を戒む 日十五日

此兩日房事と戒免はじむべし
百髮除く法 今日百合の根を

煮て煮熱し搗て新しき器
器小盛き屋の内は掛陰乾ふ

して百日置て白髮の人さへ
下地の白髮と悉くぬらさる

て是を塗まじ黒髮と生じ
白髮入ると 身面の疵目と去る法

今日大豆うて疣目の上と三
度ぬぐひ其大豆その人の家の

南向の屋に東より第二番
目の溜らけ中へ種をくび

そのとれ一所ふ疣も去るト
記憶の術 今日蜘蛛一ツとりて

須乃中ふはくまはるのたぐえ
つとく能らるるを忘る事ぬし

○近年彫刻ふさる物覚早傳と
つる昏あり甚よき本なり

① 七夕之文

晚来 雙星之佳會 世間

巧奠 昔瓜之奉女兒之

事 不宜乎併待 狂駕

尺牘 昏昏并註

晚来 今夕 今宵 此夜 在

辰 雙星 牛女 兩星 佳會

佳期 良夜 嘉遇 年會 世

間 万国 世上 古今 巧奠

穿針 絲絲 願絲 琴瑟

青瓜 菜萁 綠葉 女兒 婦

女 少女 妾婦 兒女子 宜

平可賞○愛憐

併待云云

請来獎席

仰俟顧歩

来遊割日期

七日毬

難波家鞠の會例

式り今日の鞠ハ七夕祭の爲に與行と云へ

七都北野御手水

北野天満宮梅松院

の主今曉御本社内陣入

乃内の松風乃硯仕

の葉をとて備へたてまつる

池坊立花

京六角堂方丈池の坊門入集

へ手向して立花と與行と立花の當住職專慶法師より初

東西本願寺立花あり又数品の州花と作り物あり是と

本願寺の籠花とつゝあり

天竜寺虫干○加茂松下虫干○東山一心院虫干○大徳寺虫干

大○住吉虫干神室サなく出坂○平野大念佛虫干

江○丸品佛茶もるゝ大戸○本所回向院大施餓鬼あり

大○石上布溜社笈渡の護方。笈和を三僧の肩小かけて行ひあり

逆峯入

大峯と称する即金峯山也宗派本山

當山の別あり本山の峯入り則今日まで聖護院の宮あり逆

の峯入又逆峯とも云大峯より熊野へかけゆるく又本山當山

の御門主御一代一度踏みゆる
ハ秋山より毎年の登山ハ皆御代
泰さる醜酬の聖室僧正より始
るより委しく三月順の峯入の如記

八京 文珠會 仁明天皇の御宇
より始めて東寺

西寺にて行り公事根源不出

非 文殊云々 鬼貴

江 〇同向院佛餉施入の且主現
戸當兩益乃法事執行

九京 六道泰 禎賈 禎賈
日都 迎鐘 建仁寺

の南小ある六道の珍皇寺といふ
寺へ泰さる云々 今日明日諸

人此所小まうて聖霊といふ
といふ此寺の鐘とほく是を

迎鐘といふ又模の枝といふ
より持佛堂小く俗小聖霊

模の葉小のりて来といふ
より珍皇寺本尊の茶師佛へ

小野篁の像と小堂は安置を
篁此處より冥土へ通い道
ありとて六道といふ

俳 送鐘小くして来といふ

十 諸 千日泰 清水千日泰
日方 觀世音菩薩へ

今日泰詣といふ千日小わ
或ハ四万六千日小わるとて諸

方へ泰詣とて京清水江戸淺
草大坂天王寺との外諸の觀

世音昨今泰詣といふ河州
野崎觀音和州赤良二月堂

三十 今日水 煎湯小浴といふ
無病不老くと雲叢七葉不出

三十 魂迎 迎火 〇今夕方亡人
の聖霊といふ

麻得とて火小焼く是と迎
火と云へ佛家小説多し

〇世間小松と門火小焚 檝の枝
とて清水とて事あり

火の陽光と以て天の陽の魂と降
一水の陰翳とて地の陰氣魄を
呼びのぞして亡者の魂魄をむ
くろくろべー盂漢土の鬼神と
まづる式をまゐるびつる月のな
らん

○唐土も亡人の魂をひらりと
て官服と着し門不出て空と
のども神を導き祭つたそ
又神と送る事ありこれ
ら孝子の誠と心とふ似たれ
ども鬼どものだとむまに近
し君子とる人佛者ふまどい
てかやうれとぎんを寸事あり
まこと五雜俎不見り

○非はふ火盆の茶分や玉途 其角
狂見て泣きまてをよまれ草紙の
ひくひあてなるものる 常樂菴

三十日 京 ○東西本願寺 灯笼
都拜見十五日まで

五十日 中元 正月と上元と十月を
下元といふ今日と佳

節とすつこと少くいとれる
さよあうざれども公式より用い
られどくうくハ日本歳時記
不見えり

盂蘭盆 △盆會 △盆供 △盆
施餓鬼ハ盂蘭盆

會の遺風と常にも寺小て行
ふ事あれども此月の内の諸寺
かて専らことさゆへ季ととる
なるべー ○勸善彙纂 盂蘭

盆法事とありやう又施餓鬼
のこゝに禪家とてハ僧口施
食とつる

○釋迦の弟子目蓮尊者の母地
獄に墮 餓鬼道の中にありて
食とる事を得ずよて此日百
味の五菓を供へ十方の諸佛
供養せしめ人の母則ち食を

得らるゝと經説の意ありこの説よりして孟蘭盆會とある事始まらうといへり孟蘭盆梵語にして中華の語に翻訳されば倒懸救鬼といふ事之倒懸のさうさぬふかき事誅地獄の苦ををいふそれを救ふ事を祭り乃そいふと身を救鬼といふあり又救鬼といふ器とわきて救ふ器なりとて公事根源に出

○唐土にては今日孟蘭盆會と諸寺院を営む入事支類聚に出

○枚朝にては齊明天皇三年孟蘭盆會と設くと云り日本紀出

其外委くは真俗佛事篇といへる尺目不出しりやるべし

○儒家の説より今日中元なるは以て先祖を祭り秋の盛

事と告奉るゝとあり此こと委しり歳時記論と祭畧と

靈祭

△聖霊祭△聖霊棚△聖霊棚△十四日より人家

新小棚とまはけ先祖の霊と祭るゝ○報恩經云く凶人年小

六度来る中小も今日の孟蘭盆小あつればもつを祭るゝ

十四日卯の刻小さるゝ十六日午の刻はかへるト一ス

△枝大豆△枝大角豆○芋の葉△昔瓜○蕎麥△昔とら○早

米△昔かき○茄子△あさかしの箸△蓮の葉△かけ索麴△あり

の実○桃○菟○右の類祭供する△此印のちい季よかりるゝ△

あるしるれかまきんりの心とトと合とれい季ふるゝべし

○羊中行事哥合 前大納言 中入とやくのほきもとるやん

たまはるゝ人ぬ月なるけみ 非冷おも水臭し 灵祭り嵐雪

冥冥々々も焼畑のくまうら 芭蕉
柵経や声のきかぬ身子坊主 其角
狂（狂）の乃入るに訪るるは 吳柳へ
をうかひおのひをえ ありて 陀人

柵経 今日其家の且那寺の
僧來りて吳まうり此前小

て經とよむ是と柵経といふ人

柵経やこれ曉小阿闍の水 其角

鼠尾草 （異名）△水掛州。穂
長くして水とそぐ

小便あれは名づく全躰熱と治
し渴と止ると本草にも見えそ

そ渴と止るといへ 餓鬼小水と手向
ふ用むらとぞ○七夕の丸ふも

水うけ草といふありて稻のこえ
ととれども今日のこけのけ州

ハこぞとぞの事さるに藻塩
州ふも出又千梅子の説も同し

水（分）藏王 ぞれいふくまやれんをよ
水の中まのけちのまふく

墓参

京都へ七月朔日頃より
十日頃まで小墓まうり

とらえ○大坂ふい今夜亥の刻
頃より明朝へうけて十日とびと

小橋等其外七処の墓處無縁
の者参詣とらうり是と七墓

廻（廻）と云○唐土とも今日先祖
の墓と掃除して供養とらえ

玉箒

非（非）わけてを拂て
もうつや玉箒 康吉

生身玉

△荷飯。糯米で荷
葉小包と吉祥蘭と

りめて上を括り贈答て生
身魂と祝ふといふ

○今凶人と祭るは 吳祭といふ
生る父母と饗應とらふ生身魂

といふ此月公家武家とも小世
不在でる尊親を饗應とらうり
事 紀事不出り

非（非）はくねるまともむくまの飯 友静

差鯖 鯖のサハ開きて塩ふは二尾と合して一刺と云是

と蓮の飯と親族たぐひふれく
て今日の日祝儀とす

①非 せめて鯖の骨あるものを釜方山
初筈やうしては夫婦つと其角

解夏 △夏昏納め。今日まで
夏の終りなり。僧

徒四月十五日より 夏ふこり内ハ
佛経の類杯昏写と故夏昏納とも

又夏解とも云也尚四月十五日の所
又夏の十九丁メ等見合ともなり

解夏草 夏ふこり僧夏筆電
終るを縁と以て草と

束ねて且家へ送ると云出巻。一説
不吉祥中のことなり

○秋氏要覽曰唐游右の僧縁と以て
草と束ねて且越小送る是て夏解中と云

今此草と詳ふらる小己小五部の法
身の座くらる名つるを吉祥中と云

京 ○智恩院山門施餓鬼あり
○新善光寺阿弥陀開帳

泉涌寺の内ふあり
○岩屋不動千日叅 今明日

安居頭 昔ハ幡ふあり今
ハ十一月十五日討あり

江 ○弘福寺施餓鬼。法事の
戸後相撲あり ○白金瑞聖寺

本所羅漢寺施餓鬼
○麻布善福寺藏王権現まつり

大 ○天王寺講堂一夏の結願え
坂 ○住吉孟蘭盆會角あり

近 **三井寺女詣** 常ハ女人禁
制の山あり

今日一日ハ女の泰事とゆり寸三井
寺の詠い委しく博物筈ふ出ど

近 ○浮御堂法會。志賀郡堅田
江 七月十五日より同十日を法會有

十六日俗今日親戚を會して遊樂
と云す事 正月十六日小等

日六

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付来る来年不作の兆と

と○今夕月上るる早急の晴づく月上る事遅々れの秋雨多し

六十 水灯會 宇治黄檗山の僧宇治川に出でて修行す

六十 施火 送火たくともいふ
△大文字火 △妙法の火

△鳥居火 △舟形火 △京洛外乃山々を文字の形ふたてんとてやくるり其間一丁二丁にも及ぶ鹿ヶ谷大文字此筆画甚は

市原山のいの字松ヶ崎の妙法の字西山の鳥井の形西加茂の釣舟を此外東西北處々乃山々をあまきとあり甚見事

あり事ありこれを送る火又施火ともいふあり

△送火 魂迎せし聖霊と送ると河邊小麻柯と燃と云

△京都の俗ハ今日より大坂ハ十五日ハ其餘處よりて變まる

排送る火や空を射りたる大文字 其角大文字をて流せ難波川 三帷

京都 燄魔祭 今日と燄王の縁日と寺京平本燄堂泰詣後

松ヶ崎題目踊 松ヶ崎妙泉寺堂の前と男

女うちまをり題目ふゆと付あて声れりくともあり

○山崎宝寺開帳 ○北山村石不動

泰 ○紅林念佛踊 昨今雨日

江 ○燄魔祭 ○増上寺山門開

戸 ○雜司ヶ谷とまふ

大經木流 天王寺龜井ふあり今日經木の表ふ

人の戒名法名と記し龜井の水を手向すといふあり

六十 新綿 肉裏へ貢の綿をいふ則真綿なり

◎夫木

為家

強にあらぬ士のくつれ彩の
たりのをれらふ似るらん

◎右證哥と出とどく真綿く

後永祿の頃より初て木綿の
舶来一故證哥と時代大相

違ふ事と見つたり能諧の
季寄集は九月と出三秋

小渡といふもの藻塩草と
見さる誤り七月十六日

定する事ありとや○新綿と
して九月ふする事いなり

まどきまや尚九月の條ある
と見ふるる

◎衝突入

伊勢の山田ふありと
ありとて人の家

ふ秘藏とる物と見たりや
思ふとたり今日其家ふつと

入て見る事あり往昔の諸国
ふもありかど今絶たり○今

猶伊勢山田ふ日の丸に名号と
て圓光大師の御筆と出して

拜する寺あり此日近辺乃
寺院も虫ごころいそれ突入

の餘風ありとぞ

俳はと入や大らうとや波由

◎鷹出

四月小羽抜る時
鳥屋ふこり置て

七月中旬新毛と生る時時と
出と今日時と出とと藻塩草

◎貞徳曰鷹出揃ひる時夜
分盆の聖霊會の著ととて

堀より出と故ふと鷹ももつ
ととふとやとととととととと

今と築とせとととととととと
とととととととととととと

◎非 燈火の片もやととととと
日次の所移りつものさたり定家

◎妙藥

去三尸虫法 庚申の日
とと手足の爪と切て

より集め置て今日灰小焼て水のてのむべ一板そのち一度庚申を守護の三尸虫と伏し押へて天上へ到らし守七度庚申と守れ
のほめふ三尸虫をころす
徐春甫が古今醫録に北帝
玄經と引てくる
しを説きとる

六十 赤壁月 今夕ノ月ヲ云○宋ノ元豊四年 蘇子瞻

東坡居士 今夕赤壁ト云フ所ニ舟遊ビテ賦ヲ作りタレ故事ヨリ起レリ

賦 古文真室 前赤壁賦 東坡

壬戌之歳七月既望 蘇子瞻

淡舟遊赤壁之下 清風徐來水波不興 舉酒屬客 誦明月之詩

歌窈窕之章 少焉月出於東山之上 徘徊於斗牛之間 下界

○既望ハ十六日ノク 蘇子瞻此

日 客人ト庄ニ舟ヲ赤壁ノフモト

ニ浮ベテアソブニ 清キ風ガソヨク

トフキテ水ノ波モタヌホドナ

レハ盃ヲトリテ客人ニサシ月イ

テ、明ラカナリ 窈窕トシテタラ

ヤカナリトイフ詩ヲ

ウタフト云コノナリ

七十 京 壬生寺六齋念佛あり

都 上京小川本法寺虫拂

八十 京 御靈御出 神輿今日御

祭リハ八月十八日ハ世日ハ間御旅外

御鎮座あり 委々ハ八月小出と

八十 宗祇忌 俗姓ハ飯尾次郎右門

武家トリガ世と違て 薙髪

京師小住し生涯を雲水ふま

くを行脚ヤ人そりこり

連歌乃達人カ

文學上入忌

行状委しく博
物筮ふいとす

諸地藏祭

今日地藏と祭る
事ハ是又扶陽

の術ふして秋の金氣と扶養ん為
地藏と祭まうとを殊ふ石像と

祭る事ハ神道ふ石とまうらふ
比論してあつた試みる事あり

京 六地藏衆詣。加茂山科。
都御菩薩の池。伏見。鳥羽。

桂村。已上六所。愛宕山千日詣。
町々地藏祭と云作り物とす

大坂 堀詰地藏祭分て賑じ
河内 八尾地藏會式あり近郷

より群集す此三日此四日大市あり
八尾のわらわ市又増市と云

あたご火

攝州池田伊丹ふあり
彼地の愛宕山ふい

ろく九燈籠提灯と影く燈と
祭る人其火光近郷映す

鷹山別

鷹の親子巢と立きり
諺ふ曰鷹と

飼ふ誣訪明神と始とん廿七
日御射山祭とい鷹も詣り故

廿五日小巢を辞とせりつり
この事かゝれ論ありとハ

く補遺ふ知明と

信濃 御射山祭

徳家作りの
御神事あり

信濃國諏訪明神此日薄まて
神殿と比々其外人家も祭り

の程いさゝれと云くありと云
とみきとくいむりの勅使あ

は御持ありて鷹とつり
かま草やに巻るるつりん定家

夫木尾花さく徳やの四の一ゆふ
去り里あり村のささ山 盛久

非 かり夜の神も為と云く日外許六

月令

此部ハ七月一ヶ月の
ノ事ハ

攝待

△門茶の往来の人か茶
と施さぬいふ事攝待

の事ハ仏祖統和聖嚴録等ハ出て
唐にも古く有来する一いつて本
朝の俗稱といふなり攝待の事
ハ常にもあれども此月初より
廿四日頃まで專小あり

△高燈籠 △さうこ燈籠
△きりこ △船燈籠 △花

燈籠

燈籠の影燈籠 西ハ折燈籠
△廻り燈籠 △軒の燈籠 △民俗佛

事とさす月をいハ佛小供する為
設る人多く十二三日頃より此月
中より寸禁中の燈籠ハ十四日の
処ふる事と又大坂ハ墓處より
廿二日より十五日
まで燈籠とさす

七月十五夜月はあつた西行
いそ我今我の月小月とそんて
あての山路の人をさうさん

紙裏とぬそれう灯籠の墨字ハ 冠里
踊躍ハ遊戯の長より本
朝神代より有りのことあり

踊

朝神代より有りのことあり

狂々やめる踊の庭の灯籠を
とりておん小切籠をり近吉

花火

炮術家の餘興ハ世
物より家々其藝ハ

狂々火入さすて小町器籠や
萬生々々花火せんか負山

秋扇

△扇置 △團置
△團置 △團置

連風と小納り秋の庭多宗祇
能う終て盡てもあつた扇ハ一流

夫木

定家

芙蓉をよもぎすはの風立ちぬ
秋の扇をよもぎすはの風立ちぬ

詩 秋扇詞

王昌齡

芙蓉不及美人粧 水殿風

來珠翠香 美人ノヨソホロジヤガ

水ノ上ヘカケツクリニシタ御殿ニ井テ玉

却恨含情掩秋扇空懸明

月待君王 扇テ負ヲオホフハ何ノ

京 六齋念佛 京師下加茂の東

都 千葉寺の豊大

閻の御時六齋念佛免許の状

給ふれり。盆中近在の農民太鼓

鉦笛と合奏して六齋念佛として

洛中と歩行入和州ふらふあり

相撲節會 △こころ使△童と

△過とまよふ日土(漢名)角觥

とまよふと互ふ力と争ふと云

古訓ふとまよふと心は俗ふはら

あふと心心の言葉さう角力

又ハ相撲を文字のかく

○禁中より二月三月の比諸国

小使とせらるされて力者とせ

事と部領使とて相撲の

節會ハ天子も御覽ある事して

先十六七日の間召仰つて

あり廿六日ハ内取として憤鼻の上

小狩衣袴と着て勝負し廿九日

あつてとてとてとてとてとてとて

取るとい禁中の節會とハ幡

春日をく給りくうより始まる

年中行事哥合 女房
かこまててこころ使の心は俗ふはら
々々のあふてのあふたりとて

能 胡蝶舞入りのも手巻の角力 香西

時令 此部又ハ七月一ヶ月乃時侯トクハリテハシラフ

初秋 ハトキ 朔日より三四日とゞくハレト和奇ハレハハハルクヤ

みて七月なるむまどのけいきをもちとそそ

⑤ 千載 寂蓮

秋ハ来ル年ハ止ム事ハナクヤ萩乃風のおとろろらん

全 初秋衣 為尹

小夜衣かまひもあへど吹はまうまゝ一糸の秋はと川う勢

金槐 海辺初秋 鎌倉右大臣

勢たそ好くそ字ふ朱い赤し吟との淡乃ううの波か勢

⑥ まゝ沙さ杖の色。秋と是ゆゆ他。初て涼し。かや原。浅芽。露の松風。今物と涼しき。若ふあるま。あむとふ。じくく風ハ勇ハむ始の初風。松のあじ。初秋風。萩ハ咲初。

始と知る萩ハ勇と初。始とたゆる松ハ風の秀るる。淋しき桐ハおち初。相の一糸露ハ並初。好と先し。神のあ霧ハ勇立初。

肩ハ麻とあと並るる葎ハ八色むくちあけまる宿ハもさりて秋来。薄ハ萩ふつぞそむる。浅草原ハあねとそむる。

柳柳相ハ初始ハ一葉らりてとそより立秋の処ハ故事あり山ハあじ風をそとへしそ外やまの系物とそとくもとそむる。

⑦ 初秋七字對句 詩礎

⑧ 初秋五字對句 同上

⑨ 初秋七字對句 詩礎

⑩ 初秋七字對句 詩礎

⑪ 初秋七字對句 詩礎

樹翻鳥鵲月明孤ツキカサシクモ 片月孤ツキカサシクモ

詩 初秋詞 五言律 元鎮

且暮已凄涼離人遠思忙ヨホド

ヒヤ、カエナリタルニハ旅人ノ故郷ヲカイイハキ 夏衣臨ヨホド

曉薄秋影入簷長マダナツ衣裳ニ ナレハ夜アケニハ

ハタラスニ覚ヘルニ夜カアケルハセシ 前事風隨扇

歸心燕在梁ニシタガイテアトモナ

ク古サトヘカヘリタイハウツグリニイシキニヨセキウ 慇懃寄牛

女河漢正相望ヲリセタノ天ノ川ヲヘケテ、 互ニ逢セラテ井ルヤウス

残暑 老より残暑と云

秋風の吹しつゝもま高系

夏の夕きの程ふさふさ

連暑と目覚めぬ秋の風を

能く月も流る汗や返りて

詩 残暑七字對句 詩礎

暑氣尚能凌白羽シウククハ 秋光早アキノヒ

風聲不肯入清商フウセイ 夜色闌ヤレヨリ

饑暑 送去饑上云暑の去ハ送

稻妻 光りあつて雷をうご

光るハ秋のそら先けりこれハ

風雨よよはまあはれ夏甚

き陽気秋收歛の時つらて

地中伏せんとするはより陰陽

相さあつ合て光気とあつと

季秋已後ハ夏の陽気收り伏

とるはよりいさづまなり

ひるハ風雨なり

秋の始曇り

て光るはほろとつゝ雨はなる夕
立気くを長雨はいるる

⑤ 夫木 山田ちりすく庵のそとねか
いさつらまるる松の夕くれ 寂蓮

かつききやこひふ光るるいさつら
ふらけつら火くくそこれ 兼昌

⑥ 詞 通ふ。中らる。秋くる。うらる。そ
うかた。宵ハ 宵は移妻 雲ハ 雲の

そづき。雲乃 露ハ 金りしそそぬ。
うらる。ふまらるるさ。沙芽 夕立ハ

涼一〇無常 世のそらさき 外山。ふれ
めさるる者。かつくた。あすこも。

⑦ 連 いたつまい実お打出と光るる 紹巴
つらまもさえかた物さうた世ハ 玄乃

⑧ 非 移妻とくふさるる 雲の 紙 芭蕉
おれをハ移つまを移たよりハ 全

移つまや移妻の松沖のふ楚勃
在移つまのさえぬ抱き移妻の

子雲の教さ入まて移つまの 負雨
詩 稻妻五字對句 同上

爛迷星少色 照天飛火鏡

晃奪月無光 横漢掣金蛇

秋初風 立秋の詞ふらるる

今始のるふ秋涼きき友私
ひとふたぢぢぢのそら風

秋涼 秋ふるりて涼き心と云
礼記大全馬氏曰涼風至と云

天地の仁氣散どくつら 殺伐の
時侯ふるりてくたるるふ

奇 月清 野月露涼 雅 経
秋のよふまの月の色をさるる

はや吹結ハ世風とくくさ
詞 曉みて。秋とあつする。夕く

色涼一。家ふるさむさふ。物氣
の風。風の音。吹まらる。夕く

入。風々る。あきり初り。あまのたれとあわれそよ

①連涼とそよれはあき秋の風宗祇
②非 盆あきの涼きハハの額引宗奥

詩 秋涼七字對句 詩礎

濯残暑氣朝来雨 三伏尽

助我秋声夜半風 一凉新

初嵐 ①初慕風。初秋の末よ
②中秋の中比まを乃

嵐とつゝ〇嵐と計ハ連能ハ
雜るり△初嵐として秋は定む

時節故吹風もあざやうあり

秋より陰ハ次第もる故吹風

も秋冬ハあらし故ハ初の字

を添て秋の季とす。昔嵐ハ夏之

夫木 慈圓

秋風小萩の上紫もあはれて
あらしかうつる々々あき

①詞 嵐ふる。私とあふ。群分。い
づ吹。あき。吹ま。あな
びく。つゝさなま。やま。

②連 ねやとねまと吹守初嵐末碩
あやうなる紫もむくやと嵐左秋

③能 絲入るを教らす嵐の秋さハ保久

冷 ①涼とつゝよりの重く
②寒とつゝよりのあらし

哥 雪玉集 實隆

秋冷き花とてそよ人

秋色 ①秋のいろ 艸木山川も秋色を
あうたむるとつゝ

②秋のいろ 秋の色もあはれて

二百十日 立春より二百十日は
そよ人きり今日の風

と恐るの二百十日の早稲の花
さうり二百廿日の中稲二百廿日
晩稲の花盛りは是より後の
花らり実ふるゆへ風吹ても
稲はさうりず稲の花の中の水
のよれ白さりのあり是米又
なうり風ふけい此水を吹らう
さふより米出来ざるなり 雨
ふれい此水を花ははむに上
る風ふけてもさほふ害をさ
さす雨なるの大風を恐るる
東北より吹を大坂まで上げと
ふ此風吹はのまはひえてあけ
にさうり西より大風を吹りさ
ふより是とさうり○東南の風と
いささ或いせいさちと云あて
らるれども是もさうりつものれい
大志ひふるさうりて東より吹
風の雨はさうりささい西より大
なを吹りさうり雨さるればさ

この事さうり大形の雨さうり
ておささうり○西北より吹と
あふせとつて日和より西南と
沖氣といふ曇りてむくむく
ども日和つづをりのさささ
りさうり出せい此日和の長さも
のまて西より晴てくらくかき
の沖より雲をつさのふして雨
ふるさうり此風吹はけは日和も
曇りも雨もさうり長くつづ
りのさ○申酉の方より吹とま
せといふ日和ついでと○東よ
り吹とさうり西より吹風はさうり
といふ風あり此風の地へさ
つめて其所より風次第小
さうりさうり大風さうり 稲を
損ざる事甚し雲ありて北
風の雨を洗さうりさうり秋
北とさうり秋の金さうり北の
水と金生水の理とて雨を生ど

夕く去れとも夜晴
て北風の日和より

草木



七月の草木を集むる内
の記とあり八月にも用ひ又秋
三月にも用ひるものあり

楓 △青楓の本名を雞冠木といふ
和名とついでといふ事ハ蛙の

手に似たる葉なるゆへに名づ
くるなり種類多し

異名 丹楓。紅楓。霜楓。楓錦。

○和國乃楓と唐土の楓と
大小色々異なり葉ハ三角あ
らして兩様なりし出る

唐 楓  和国京都
高雄楓圖 

○いへていさだ。さくそ。ま
ゆみ。これ類紅葉とるとい
バ九月なり入りく九月草
木のさき後ふし

○万葉 茂草ふりつる楓なる毎
いもと けつ 葉ぬ日なる

○秋 龍田川おほくさなり 赤楓 紹藤

手とあふぬいぬ産ふや楓の子 芳室
風ふらぬさぬあらし 赤楓 とも

○狂 さいさい 鈴小あらし 竜田川
秋えて 萩入ちんへ 赤楓 貞室

○楸 キサケケの畧へ又 雷電 桐
ともいふ又かきさうきげ

ともいふ此木 雷除とさう故
○さげのてく 長一尺許の葉

枝の間小垂る皮鱗のごとく

異名 木玉。實名 楸。梓。荷

榎。さく。少一ツかりし種
類多し。こいさだ。さういさだ

赤芽栢。あづさ。河原いさだ
等諸家の説多し入りし
補遺は出さへ

○夫木 うい玉の夜のさけい 楸の
きよた 河原さくさる 赤人

○俳 取うそふさくゆり 楸なる馬尉

柞 栢の屬あり実ハ渋くして食ふたへど暮秋ハ

紅葉とれども色々す一奇

ふれ色々をたふすと多う

⑤ 万葉 山ノ木の石田小のちを原

と川くや君のちらゆらん 宇合

⑥ 連 ちらぬらう朽葉をさる柞細巴

⑦ 柞 栢の類とて日本ハあることる

今にてまゆことゆりのみきま

とて枝ハ矢の羽のごと物ある

木の種類とて其羽をたをま

ことゆ物産家衛子に充たり

陸奥とて紙ハ作る物此木

⑧ 表のむと表匠まをこをふりし

これとむじふあせともなる 頭輔

⑨ 櫛 宋名 黄櫛。天子の御袍

これを以て漉る故ハ黄櫛

深くつふ三月ハ白花と開き秋

と中ハ紅葉とる漆の類なり

木 槿 日及。舜草。

花ハ朝ハ咲

て夕ハ隕る故ハ槿花一日栄

とつう今非諧者流槿と

あさハほと混ぜりむり

とむくげとらさざやとむ

一とさり次乃万葉集の

奇にて知るべし

⑩ 万葉 約旦のあさあきつて咲くつ

夕ハあきつてまてまてまらうたれ

○ 是むくげの歌なり古名

朝顔なる事あらうべし

⑪ 非 半日ハ筒中せくる木槿弘芳室

ふとみそわくとさひむくげハ杉風

朝 負 舜又牽牛花とも昏く

近世数種の珍花で出

ザリ一名 假君子。朝花ひくき

辰の時ハあきむ蔓州なり

①浦風ふ浪やあけくん 續家
 必ひゆ石の物良乃てな 顯季
 詞花の物良。あつ物良。ふぶの
 の炬籠。仇るるをれ。一付。夕
 かあすうあ。あつ物良。あ
 りとふかり。さかりや。あ
 ありいもさ。

②連むふ日あき物良の鏡 宗砌
 ③能藤つふみれれりい水 千代
 葬のせめく候て浮世か 常敬
 狂物良のあふなく人 同也
 あやう今の子物あさ 僧一道

秋海棠



異名 爛腸
 草。断服

花。りく海棠とつ名。海外より
 来。故名づく

玄及

會及。五味子。莖を
 美男くろくとつ堂上方

こを今も水も浸し糸まきせて
 髪と結いゆぐ地下及び民間

元文寛保の頃まで此製
 残り髪附油さくふりて

より玄及と用る人あり只雲乃
 上のもさう花は三月実は七月く

桔梗

△さくらがうのいすくへを
 蛾のひらささとして

桔梗の花咲くねんくと云々千代
 桔梗の色老子のほの粧ふは寒竹
 狂約くてこれも桔梗の染物や
 色あさめてとつるも是さう来門

澤桔梗

葉は山丹に似て少く
 短く又桔梗のぶと

く大ふして花碧なり 根白く沢
 中ふ生し長く生るる又浮
 薔花も沢桔梗とつる

蘭

京師の俗にランと称す
 △らよ 野ふあつ物ありとさ

の葉は似て切又あり薄紫乃
 花とひくく香い葉ふあり蘭

三種の異あり漢土の古蘭と
つゝの今の茶蘭あり和の
藤袴と称する物本朝の昔
より蘭といふ物入和漢近世
蘭と称する物の建蘭あり
次ふりり付

古今

敏行

何人々をてめよる中後ころ方
来り物ころに世と白り付

夫木

匡房

かき入世の系果の姉とま
子代の秋まを白へとてりり

俳

蝶丸の坤と場す葉支浪

後袴わのりまろぬとせ声可

狂 狂まはれままはてとやらん

白ひもろとさそとる白負徳

建蘭

数十品あり其佳きり
の價大貴葉長

く麥門冬ふ似て一二尺花の莖と
抽て数花開く蜂ふ似たり

俳 葉はひや葉枚削て墨眼る巴靜

さる若とととと葉を茶白ふ才丸

狂 惚ふ似く尻てまなれたるれい

廁のそふ白ふるらん喜文

女郎花



小翫ひり

さるこの根醬のふうう香

あり花の人のよく知る如るう哥

いよむのそを女ふたとへて戀哥

小尤多し俗敗醬と混せり

偶よく似たりを以て誤まり敗

醬の弄花家羽衣と云花々

古今

僧正遍照

名ふ多そをわらうりそ女郎花
これ花と人まわらるる

○此とての遍照々奈良へまら

まらるとれたれとて山ととと

まへとととととととと

千載

女郎花隨風

雅兼

とととととととととととととと

吹束の末もるのうきま

連とてはるは足てひるる人もは 紹巴

非ひるるくはあややあやな芭蕉

修い志とりのほやあやあや后里

茶の花 ともは少一ハ似
う花白一是と男

べーとつるて 覚束はむ万葉

小男べーとつるてやうる哥れ

ふもこれとてよめる哥ももき

くんと又茶の字義もさごりき

ず按とく小女郎花小白と花も

あまはそれとととこべーとつる

うや爰ふハ先俗説よとごり

茶の花よとごり

非おらやわらうや男べー百外

男べーとつるてはる地ふ其十

狂男一とつるてはる似せて

いふる人の原あやうや貞史

仙翁花 一名紅梅草
花の形かんひ似う

藻塩草 花の形紅梅草の花の
そらの心とつるてつる那

非 仏教たま去れのつるてつる入安

観音艸 用藥須知又吉
祥蘭と唇う

花のうすむとつるてつる
こんで穂ををるす

非 おらとつるてつるてつる
珠明

翁草 初春苗と
生一葉麦

門冬小似て甚白く白髪の如
故小号く花秋へ三々國會出

散木集 俊頼

乃の辺の人なふらうとつる
あうんゆれとつるてつる

非 松のの枕とつるてつる
三惟

第切草 漢劉奇奴艸といふ
元秋より出す又茶

師草の青茶。花小黄。三
稜の莢とつるてつる

あり○青芥又茶師草と名づくる此草金瘡の薬ある故
る劉奇奴ふくれと充れども
茶能い一ありて花葉異あり

哥 鷹百首 定家
秋の神ふまこ松のくろくま茶
ゆへてふちややうねるらん

能 さいごまふらねのまじま 五鼠
如菜 疝氣よハ陰干にしてゼノ
用也○血を切る守りハ此葉と
陰干して粉や油を揉み付る

○此葉とちぢれば汁出るこれ一
切の金瘡又ハ腫りつふつけ
てとるなりと妙あり

益母草 一名 菴蔚。莖胡
似しう節々小花で開く実
あり婦人の病に功あり故に益
母といふ目と明らふ一精を
益と故に多とくきの名あり

款 ○波木△系款△白款△小款
異名 胡枝花。天竺花。花史出
和 △古枝艸 蔵五鹿鳴艸和名。初見艸蔵
名庭見艸蔵玉月見艸藻塩野守艸同上
冬莖かれどして春葉を生じると
木款といふ。冬葉莖ともふれて春
新しき苗を生じると小款と云
△系款ハ花紅なり△白款ハ赤ろき
花なるべし 奥州宮城野ハ款多
生ふる山あり其内ハ白花あり又
白紫咲こけふもありとぞ其外詞
の所△印あるハ季は用也

哥 續子載 我神ハ款のまじま
とよまかたは露とかなん 俊成
玉葉云女子かたりの款の花のまじま
まじまをくさる秋のまじま 為家
藻塩 田代まじま此中ハ花を聖とす
ありハ款神をほうつる

蔵玉 司入城のまじまある古枝ま
じまの秋も花はまじま 西行

詞 嘆。句ふ。ちる。うららふ。風。花。ちる。

霧。はらふ。霧。はらふ。霧。はらふ。霧。はらふ。

古。里。の。萩。の。し。き。衣。は。秋。萩。の。花。さ。う。衣。

萩。の。花。さ。う。衣。は。秋。萩。の。花。さ。う。衣。

△。中。の。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。の。古。萩。の。萩。

鳳仙花 金鳳花 又みゆき
とつろの花紅白あり

花のわらう飛鳥のこく又鳳の
みよきとく物の骨と解と故又

骨ぬきこの名あり 三又圖會に出

非 鳳仙花の骨をぬきける 春芳

詩 鳳仙花詞 無名氏

細見金鳳小花叢費盡同

花添作紅 ヨクくコノ花ラミレバ
コガ子ノ鳳凰ノヤウナ

ハナガアツマツテ咲テアル花ノ色ハウルハ
コイバニフオシニスツイヤシテコノヤメニアホ

ウ染タモノ 雪色白邊袍色紫
テアラフ

更饒深淺四般紅 ツノハナノ中ニ
ハユキノヤカラ

白イ邊ガアツテ大臣ナドノヲサレハ
ムラサキノハウノヤウナトコロモアツテ
コイトウスイト四色ニソメワケタ
シヤウズノ手キハカ見エルゾ

旋覆花 野徑の水溝乃邊
多一丈一重之

重瓣の月の甚少しせんへの
物と号けて水慈童と云花

野菊の黄もろこし
異名 滴露金 野油花

野菊 鏡釋蒿又野粉團と
似て莖か

救荒本草に出 又春ハトあると
秋花と云 野菊と云

やいと花 葉女蔓ふ似て花を
筒ぎれなりやう

かきつばたさきさきり小花いろ
白く内をこし紅し小児の

これの莖つきのかきつばた上あり
て身にあく灸のまゝととも

似たりゆへ名づく
非 これも又父母の恩あるやと花 立圃

曼珠沙花 和名 天蓋花 燈
籠花 漢名 石蒜

異名 烏蒜 老鴉蒜 水麻 蒜
頭 艸 漣々酸 一枝箭 葉

花の莖と
似たりゆへ名づく
似たりゆへ名づく
似たりゆへ名づく

ひろく甚く
常山花 葉の梓樹に似て

六月花を開く七月ハ此虫
とるなり 常山 苗乃名

蜀漆 根の名なり
非 目をこれの花もろこし

顔桐 葉大さき五
六寸ありて鋭あり

萬麻子 和名 萬まま かつま
かきつばた

法柳 法柳所々あり 洗取
法又洗紙の仕やう

日本 歳時記に出せり
非 法とや仏名の票りしとん岩翁

茗荷花 七八月根のかきつばた
子と生じ即花あり

鬱金花 異名 王金 葉の芭
蕉に似たり花白

質紅之深深色色小小のの此此根根あり

花花ののささののささふふ似似てて甚甚大大なり

⑩ 非 花ののささののささふふ似似てて甚甚大大なり

とほとほくくるるをを念念珠珠とともも守守也

へりへりこのこの名名ありあり実実ふふより

てて季季ととせせり

⑪ 非 今糸糸りり先先一一莖莖ととままちち菰菰 玉玉瑞

蒲蒲萄萄 ⑫ 異 蒲蒲桃桃 ⑬ 草龍龍珠珠

てて棚棚とと延延ふふ実実とと以以てて季季ととせ

二二種種ありあり一一種種はは多多びびぐぐららとと云

紫紫葛葛 ⑭ 多いいぐぐららのの山山葡萄葡萄と

びび色色はは此此のの瓜瓜以以てて深深くくるる物

るるりりととをを但但しし葡萄葡萄のの実実乃

名名るるりり紫紫葛葛のの樹樹のの名名一

種種のの別別名名萼萼萼萼とといいふふ。

エエビビととはは醜醜くくららぶぶたたのの

実実のの色色小小ははききくくららぶぶららのの

⑮ 非 照日日ととのの柳柳へへああけけるるゆゆららゆゆ野野坡

⑯ 詩 全全七七字字對對句句 詩詩礎礎

雨雨来来枝枝上上清清泉泉沾沾 珠珠顯顯重重

露露重重稍稍頭頭紫紫玉玉垂垂 水水晶晶明明

妙妙術術 蒲蒲萄萄とと壘壘のの根根乃乃切切らられれ

栽栽てて春春ののややうう其其末末のの木木小小穴穴とと一一

ああけけぶぶらられれ枝枝とと一一ととななりり二二三三

年年とと経経てて枝枝ふふららりり長長くくももりりて

東東のの穴穴一一かかふふ蒲蒲萄萄ととななるるのの

根根とと切切らられれたた東東のの木木のの接接木木と

かかららるるりりよようう生生長長ししてて実実とと多多く

むむととびび肉肉厚厚くく味味美美しし是是秘秘術術

桃桃子子 ⑰ 異 仙仙菓菓 ⑱ 蟠実実 ⑲ 三偷偷

○洛陽路 ⑳ 種類 碧碧桃桃 ㉑ 白白桃桃

○早桃五月の毛桃山中の冬桃十月の毛桃霜挑上これ西王母の桃の類

日本に在り。此外種類多し。多く又異品あり。大なる一抱にも及ぶものあり。

○能桃桃の實の眠りも蓮二種つる桃の若みやた若く煮一在挑尻ふりて吹くさくさ負柳こゝろのふらふら

詩 桃子五字對句

顆々粧霞媚 王母千年実
團々帶露肥 秦人幾代孫
テコエタ

詩 事類賦

○果實多品惟桃可佳天々其

色灼々其華

○為仙益壽ト

○或制而祛邪桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云

○或美后妃之德女ノトクヲバヲ桃ニ比シ

○或報瓊瑤之華玉ノカハリニ桃ヲヤラ

皆詩經ノ故事ナリ

桃子 三偷 漢武帝ノ時東郡

東方朔ヲ呼ニテ見セシム短人方朔

ヲ見テ曰王母ガ桃ヲウエテ二千

歲ニ一度實ラムスフ此人其桃ヲ

三度偷メリト云ヘリ 漢武故事出

青花 山海經ニ曰磅礴山ハ扶

巴ガル虬ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千

圓其花青黒シ万歲ニ一度ミノル

木瓜實 異名 鐵脚梨。楸

リンの種類多ク實も大体ニ似

草木瓜あり林檎の
さくさくも味酸

槐花 六月末より七月小至まで
黄花と開くあり

の本の種類こそ葉の夜の眠る
唐土のいへり槐と植て其下に

て説を聴くと云日本にては
其遺風とまとい大臣の別名

と槐門といふ大納言を亜槐
と呼ぶなり

詩 槐花五字對句

畫影籠青禁 縣古蟠根出

秋香拂紫宸 城荒細葉殘

槐之 植三槐 華文類聚ニ曰玉
晋公祐キツカラ三

槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラ
ズ三公トナルモノアラントイヘリ

果シテ然リ天下三槐ノ王氏
トハイヘリ

蓮子飛 蓮の子と葉といふ
房の中ふあり此こ

ろ自く飛んで水中小入
非 蓮花実とあひるも蓮子の 註明

在 極赤もかろくめ於て蓮臺と
ころれて人も花より多し 宗惠

詩 蓮子詞 東坡

露復含烟 三トリイロノ玉ガ蜂

緑玉蜂房白玉蟾 折来滯

醉嚼新蓮一百圓 味ノ汁ノソコニ

刀豆 一名 挾斂豆 葛豆

葵 葵のこけい 蔓草なり

非 抱きいてほむる豆の垣根 宗因

夕顔實

○瓠。壺盧。のつぼも
も花白

○青 夕顔のこゑむはこゑをそ社
こゝて浮世のこゑもあつた

○非 瓢箪の目もぬ煙とあつた
酒肴のいふ身けあり生

○青瓢箪 これ右ふゆみ
生ありあつた

○非 病む病むと青瓢箪と云ふ
人乃面色ふたふた

○西 瓜 此種ハ元西域より傳
へし唐土にも漸

○五代の時より始まり日本に慶
安中黄檗隱元入朝のよ

種と携へ來りて初めてみ
さるるへり寒国に生ぜ

○非 出女の口紅にむ瓜瓜支考
晴明小法師とせされい

○狂 赤なるもといあつてま白
西丸身とふるもいさう

○妙 薬 衣服ふらぶどのやふれ
つとらふ落とふり

○何 近世畿内種を
うさる味西瓜

○似 美るる皮のうへは接
あり葉の蓮の葉れが

○中 野ゆて蜀葵のい

○非 瓜又非菘人の後ま基中

○東 壺東の上とる要東は大
て腰細い〇撒東は小

○味 酸此仁と菜物とや漢土
の教品あり本邦は少

○非 針とるやふはへる露州

○狂 ちかいて実け厚けれは
る川やとといはつた

○関 刺

詩 枣五字對句

甜出諸錫上
今作中州瑞

香居百果前
元從外國傳

外雖多棘刺
內實有赤心

北園有二樹
布葉垂重陰

詩 東詞 五言絕句

外ニイバラノハリハ多クレトモ内ニハアカキ
アキ心アリトナツメニタトヘテ人ノ外
見ハニガクシクカラクハアレトモ内心ハ
清キコノナリ赤心ハキヨキ心ヲ云ナリ

粟穂 種類 和。梁。秣。秣。又粟
奴とつふあり下品あり

哥 万葉 多又振針の社さうせい
去日の時へあつたさうかゆいと

西米 生願 神代卷 保食神のい
くは生じると見え

少彦名神 神代卷 少彦名神の
甚短小の神なり

大己貴命と共小国造りまじく
終小淡路島小至り粟莖小縁
のり莖の立生る小弾くして
常世の国小飛去りくいと云

稲葉の雲 楡の葉此とく
あひりて雲乃

おとく見ゆりをいふ

秋風は田面ふみかきとく
いふのまふふあそあきゆ 通茂

非 上州 後久我内大臣
門田のいひの波乃花より

稲花 畠 富州の花
水影草

夫木 後久我内大臣
夕まのいひやまはら小我名乃

非 夫木 後久我内大臣
うらむまて小念のふつむぬい
そるる世のそそあぬ 人丸

非 夫木 後久我内大臣
非 夫木 後久我内大臣

早稲 △早田の稲 △コノコノ
△コノコノ コノコノ コノコノ

①万葉 コノコノ コノコノ コノコノ
②コノコノ コノコノ コノコノ

③コノコノ コノコノ コノコノ
④コノコノ コノコノ コノコノ

室の早稲 頭昭の袖中抄
曰コノコノ コノコノ コノコノ

⑤コノコノ コノコノ コノコノ
⑥コノコノ コノコノ コノコノ

⑦コノコノ コノコノ コノコノ
⑧コノコノ コノコノ コノコノ

生類 七月の生類と集むコノコノ
⑨コノコノ コノコノ コノコノ

初鷹狩 △小鷹狩 △初鷹狩
△コノコノ コノコノ コノコノ

郷の鷹狩コノコノ 冬の大鷹にて
大鳥とコノコノ 秋の小鳥狩コノコノ

鷹とコノコノ 雑談抄コノコノ
雀鷄コノコノ 小雉コノコノ 鶺鴒コノコノ

⑩コノコノ コノコノ コノコノ
⑪コノコノ コノコノ コノコノ

⑫コノコノ コノコノ コノコノ
⑬コノコノ コノコノ コノコノ

夫木 順徳院
著たコノコノ のコノコノ のコノコノ

かコノコノ りコノコノ ○貞徳説コノコノ 鳥屋出コノコノ
鷹と居コノコノ て初コノコノ らコノコノ 狩コノコノ

と初鷹コノコノ とコノコノ 同コノコノ コノコノ
とコノコノ 夫木コノコノ コノコノ

⑭コノコノ コノコノ コノコノ
⑮コノコノ コノコノ コノコノ

⑯コノコノ コノコノ コノコノ
⑰コノコノ コノコノ コノコノ

⑱コノコノ コノコノ コノコノ
⑲コノコノ コノコノ コノコノ

⑳コノコノ コノコノ コノコノ
㉑コノコノ コノコノ コノコノ

㉒コノコノ コノコノ コノコノ
㉓コノコノ コノコノ コノコノ

㉔コノコノ コノコノ コノコノ
㉕コノコノ コノコノ コノコノ

鷹打 山中にて鷹と捕を
鷹打と云そのたを

おころしといふ人多く伊豫の
國をさるる

荒鷹 鷹と捕ていまご
人もいざると云則

とりたるまの鷹あり
其角
非 蠅ひらの荒鷹をさるる

鳥屋勝 四月より羽毛と替
七月上旬まで小羽

毛と元のぶくわくするなり片
鳥屋とも片鶺鴒とも云二年や

と兩鳥屋とも兩鶺鴒とも云三年
や片鶺鴒とも初より小羽

毛全くそかり勢よれを
鳥屋勝といふり三才圖全出

鳩吹 手と口ふあそ鳩のこゑ
と真似してたうたう

袖中抄に出る
非 鳩をさるる山

まうしにせらるるの物人
おのうとていふやせや守る好忠

秋蛙 秋も鳴く蛙 非 人れ
蛙も秋のあまなり 桃青

狂 杖の杖乃夕とて貞柳
水ふる蛙の杖乃夕とて貞柳

秋蠅 非 凡呂されたの窓と
うけや杖の蠅 鬼貫

秋蚊 溢蚊 残る蚊
非 蚊の面を通 雷蟻

秋螢 鈴鹿箱根の山
溪の八月比まて決山

小虫あり併るが冷気俄に
至るといふ螢も消る

蚊蠅の類夏の部々異名
等くりやあるす惣じて秋への

る出る別小子細う

哥ゆく螢の上すていぬへくハ
秋風ふくと厚ふあそせ業平

非 弟退マ螢も秋の天の乃入重

秋蟬 漢土よりハコトベテ蟬を秋の月のこと

拾遺神多の蟬のねるはくて 秋の初風とらまはるは月

非具をさすもや秋の蟬曲樹 秋の月けあふ蟬のねるを許六

狂を授けしことばにねてハ みくふ秋の月けあふ蟬一東

詩 秋蟬五字對句

客老愁城下 カクオシテシヤウカニ 小池兼鶴浄 コイケケンツルキヨク

蟬寒怨路傍 センサマメウラムロバウニ 古木帶蟬秋 コボクオニテセウアキ

詩 全七字對句 詩礎

萬頃白波迷白鷺 マンキヤウハクハミヨヒハクロ 落日中 ラクニツチ

一林黃葉送秋蟬 イチリンノクハヨウオクルセウセン 不知秋 シラフアキ

草色河橋落照中 クサノイカヘノカケノチカハハキ 漢宮秋 カンキウアキ

蟬聲驛路秋山裏 センシエイエキロシウサンノウチ 噪暮蟬 ノセムセン

蛸螿 トウキョウ 蛸螿の種類 トウキョウノシノビ

或ハ青紫長一寸バウ此ヤハ 夏鳴守俗よりとと鳴

とつりあはれども初秋はいつ 是のせもはつり

非秋の採かもしはしよ素夫

茅蜩 チウチウ 寒蟬 サムセン 茅蜩 チウチウ

青緑 アヲキナ 山中ふあつて 晩ま

尚よるをく其声聞く小堪

夕立の音もあはれ夏の月

かこみくふは日くじの声 或内觀

古歌ハ夏ハ読より連俳ハ秋

連 日々じふぢうぢうと秋の糸肖相
非 日々にやちよひうらなす後鬼貫

秋胡蝶 あきのてつ 毛虫或ハ芋虫など
の化ししうりのあり

哥 源氏 義経のたねとてまや下まふ
秋まふひのうらとくむらさきん

非 蝶々や今けりうらな葉の色東歌
葉園の花ふかや秋のての連三

狂 虫さるものけさもぞ秋の葉畑
あやうく蝶のまひくそする 様賀

田畑虫送 たぐひのむし いづら送るもつみ
田蝗害とるさん

送る又ハ松明と照らして田中と
つら 鐘鼓と鳴らして 野外ふ

呼ぶもありひり陰陽寮ふ
命どて 船岡山まき山とあ

事あり

蜻蛉 せみ (和名) アキツバ △胡藜
△エンボ ○エンボ △アキツムシ

赤卒 △赤んぞう ○あやんま
色やんま ○んぞも大小ありて

色と興ふするのそりやんまハ
古言ハエムハとつら通音あり

かげろふハ元陽炎の名ありこの
ひ水辺の日かけハ飛ぶがゆへハ

陽炎の名とハかりうらとつらと
秋つむとつらハ惣名とて古

名かり次々故事あり

胡藜 俗ハムキトニボウ大トて
其緋もりの緋 と名づく俗

カ子ツケトニボともしム

古哥ハむちろふとよもよるニツ
あり一ツハ春乃新ゆハの事一ツ

もこれむの事あり

後撰 秋は好のこもこのふふは
秋のちりヤワラきこのこと

非 ちりろふハ莫なる各やんま都書
狂 ちりろふと報はてや一とよ

川花ハこゆりやんま入る 靡素

詩 全七字對句

詩礎

風定織枝堪綴足

相逐戲

雨来密葉好藏身

闘高飛

蜻蛉

日本紀神武紀卅一年夏四月巡幸

醫帖

日本紀神武紀卅一年夏四月巡幸

故事

日本紀神武紀卅一年夏四月巡幸

あゆみ脇上の 嘯間丘ふ登り國の状と望ませりてのなまこく

あなみえやよれた國と獲り内ゆのまきれ國とつとも 猶蜻蛉の

醫帖ヤッガオとありこれより日本と始を 秋津國とつり

○まきれ此いし此尻より付てまに飛ぶるへ

虫 虫の音 虫の聲 虫の題

次記す分いづももよあり 哥 夫木 花山院

うり合せむく虫のまねおらしてひよそそきる秋のまきり

家集 月前聞虫 清輔

あもあや小まをりて青れ月をみそそきりうらまはれ

新後撰 野虫 為氏

秋のつとをねとてまきりてるまのいりあはれ

龜山 庵虫 為世

あふなるまのつとをねとてまきりてるまのいりあはれ

詞 あふなるまのつとをねとてまきりてるまのいりあはれ

あふなるまのつとをねとてまきりてるまのいりあはれ

あふなるまのつとをねとてまきりてるまのいりあはれ

表は雨入て鳴露の音を命。つとよ
よんが。羨望する。あまきすむむ
霜秋の末のまゝ。秋の風のあはれ
響は長きよのあひくべい。人あ
むの声んうく。いり福のさそ
とそふ。もろもれもさあす。

連風や秋涼子とじき虫聲 宵相

非 之終の福るまはるは虫の声 其角

詩 虫詞五字對句

砌冷露喧聖 客愁連蟋蟀

六かヒヤ、カニハハヒガサレ
キニチカツイテキリニタク
冬人ノモノオモヒハム
ヒト庄ニフカフナリ

簾疎月到床 亭古帶蕪葭

スダレガニバラチハ月カ
ダモキニユカニサシコム
チンガフルビテアヒト
ヒトツニナル

詩 虫詞七言對句

詩礎

兼段曙色蒼々遠 夜沈々

ケンカンレヨシヨクサツクトホク
アレハラノヨアケノキキガア
ヨカシクト
フケル

蟋蟀秋声處々同 月色深

シツツシツシイ
アキノムシコエハイツクモオナ
ツキノイロモヨフ
カクニコル

虫撰 昔の殿上人さぐ野をど
道遙く歩いて虫と交

らむひいとありの松虫 銚虫
の類とあつこと加茂の社司よ
こ奉りし事 禁秘抄に出

年中行事 忠頼

いりくふさる母の虫とえ人乃
花より夜送てそとるまふ

虫合 上小同 非 寂いさいそれ
もねとくむむ合北虎

虫盡 殿上人乃虫合のてとく
平家物語のこの語あり

虫籠 今も猶加茂の社司よ
まじぐるの奇工目

非 虫籠や登見て林のむすす 野水
をねとらうせり

虫賣 非 びーうらまはさーい
うせをぬるき 梅翁

響虫 馬のふつへの音



小似る故に名く。松虫。鈴虫。響虫の三種人々其音と尤賞す

哥 山家集

家隆

おるる人ふれたのゆきさけの
考にてとらる響ひりや那

月鈴虫

○金鈴虫とも云又月
鑑見も云色黒く少

黄く音ハリニくとも

哥 夫未きとそとくしるふそとそとそ
神禾の虫けとくひの声 範光

詞 ちよとて神ちよふ
松虫の聲やかひの聲のさ 紹巴

連 松虫の聲やかひの聲のさ 紹巴

松虫



蛸とも云其音ハ
チチロリと鳴く

秀 散木

俊頼

夕きれハ世ハ身や物をあやうん
松虫ちよとてあまやうん

詞 ちよとてあまやうん
ても。松虫ハ身や物をあやうん

△人里の虫。雅も人長をあまやうん

連 松虫も風ふとるく松の聲 宗祇

能 松虫ハ松とそをのちうん 友静

○ とも虫松虫の異名とて一虫

ちよとて又松虫ハ声清亮よ

してニイ、とつた如く松の音ハ

似て松虫とつたもつた。○謡曲

野の宮の關ハ誰まら虫の音ハ

んくとして風范々々うとく

ハ松虫ハんくともまや又

狂 たるはら。秦湯のちよとて

ちよとてとなく松のハの声負徳

右の外説多し上と圖とる所の

畿内とて人家籠の内ハ養ハ

丸ハ尚國々水土とて大同ハ異有

蟋蟀



一名 莎雞。とも丸
○ちよとてちよとて

其音キリクスと鳴く二声三声と

舌つてとらるる也 委一くハ七ナニ
目小あり

○順和名鈔曰蟋蟀一名螿。木

里木里須とつた加茂真淵の説

よの蟋蟀ハ万葉小

哥 秋風之寒吹奈倍吾屋前
之浅茅之本蟋蟀鳴毛

とよとよとよふよれの和名抄小蟋
蟀とよとよくすよとよとよの誤り
にてとよとよとよとよとよとよとよ

号 夫木

惠慶

なをふしうさめうさめうさめうさ
たうさめうさめうさめうさめうさ

雪玉 早蛩鳴復歌

為氏

初秋風のさうくくも
まこ座をささめもほりし

詞 山蔭。秋の夜。松の月。く
このはらう。はくさせとさく。

連 ころくすはめあめあめあめあめ
非 常灯や蛩あうふまうく才嵐

促織

一名 斯螽の翅織
俗ふとくくくくくく

蟋蟀もとととととととと此斯
冬蛩もとととととととと蟋蟀鳴声

とととととと如くキリくキリとつ小故
音ふ依て名づく此斯冬蛩ハ状乃
俯仰ふとつて名つくる

金兼さうあはれあうるまじりか
ととととととつれあまきまもく為氏

詞 声のあまど織る。とと織る世の
あまどとと。あらしとと。秋のあま

蛩のたてあめぬさ。織る。ふの海
蛩 蛩 蛩 蛩 蛩 蛩 蛩 蛩 蛩 蛩

生 秋ふつてて鳴入 出 出 出 出
蛩 蛩。古保呂木ありし 出 出 出 出

千梅の説ふいととかなろさ一物と云
非 かなろさやとととととととととと

電馬

脚状促織小似て稍小
脚長く好んで電の傍か

鳴故不電馬と云 漢名 電雞。好
事の人是とキリくすと考へ云ハ誤

非 打つハ地をけ衣かいて弘来雨
桶の壊れれて鳴むいん馬黒

○さうくを。とさう。さうさ
 の三虫同類やて和漢とも弁
 別詳くるべ詩経小五月斯
 冬蟻動股六月莎雞振羽七月在
 野八月在宇九月在戸十月蟪
 蛄入我牀丁とあり朱子注又
 三虫一物やて時々變化して
 其名と異ふとあり

稻虫 八月稻の牙小委一
 々あり才季の多分七月と

阜螽 此虫性不嫉雄虫数虫一
 つらひ一母百子故小五百子云

又此虫一夏小子と百生とる故小五百子云
 能門の夏の笑と進出といふは此虫也

推虫 能推虫乃争り一
 葉や葉小舟 友静

蓑虫鳴 漢名蓑衣虫。結
 草虫。壁債虫。木

螺。このむいとわうにてと
 季とむとんものひりくとと

ハハ秋へ清少納言詠々風
 の音聞知りて八月をうけ
 進ハ父とくくととるげか
 つみくあれまるとつら

分幣うえ親のかもあはれと
 秋風さあむみのゆの声 寂蓮

詞とる本の葉。秋風そのむ。
 能この虫は舌を咬ふ事と葉の房

馬追虫 田家その人家近く
 鳴る声牛馬と追ふがほ

○叩頭。又なうら
 ち虫もいふ又

そつくとつり(古名)イ子キコ
 形緑色よくて頭尖り社人の鳥

帽子着たらふ似たれ俗小祿宜
 とつ又又兩足の高さととれ身

と伸くと稲とほくが如く動
 かりゆへよつとさ虫もよ

藻鳴虫 △藻住虫の音。能
 小こしうと多くよ



り藻に付て殻の一片有り螺を
よれうといひ分殻の意なり

○又刈り藻に付て居て此虫我々
と身と亡む故に名づく 古今事雅抄

奇な多くありたること詠り
○古今事雅抄より此虫の我々と

私とてをるあり世にうらむ 典侍
○非 虫はく喜ぶ人の涙うか嵐香

蚯蚓鳴 (異名) 蝻螂。寒放。
陽頭。土龍。歌女

み、その目不見の詠あり鳴く
聲もその清く笛とよくこけ

雨ふれの出る晴まひ必夜鳴く
○非 積まるかよひあてなくま鬼買

狂 狂ういふいふは考ふとへて
うたふ寸の板もよひ愛 舊晋

蝻螂 (異名) 折父。蝕。蝕。蝕。
蝻。不過。芥。好んで

朧とさる故にいひてこの名あり
と畧していひてさるるもいふ

○非 さるる後うらむる蝻螂は左来
様初懐卿う芥以不彼乃園金波

○狂 蝻螂う芥とありは戦場不
たえすもとぬのまのあふ流半

拒車 齊ノ莊公出テ臘
ス蝻螂車の音を

蝻螂 故事 拒車
○非 芥ヲ振テコレニ向フ莊公コ
レヲ御者ニ問フ答テ曰ク蝻螂ナ

リ此虫進ムイヲ知テカヲ量ラズ
シテ敵ヲ軽ニズルモノ也王曰コレ

勇アル虫ナリトテ輕ヲ迎シテコ
レヲ避ケタリ四海ノ勇士勇ヲ

賞セラレタルヲ傳ヘ聞テニ十
齊ニ帰シテ國甚強シト云

常山虫 此虫小児のやまひに
こゝろを益せしむ

必用 七月一ヶ月要用の事養
生天氣食物料理とあり守

樂事 風涼しく快く○虫の
音ありといふことあり

おまひあつこのくれも夕けよ
 夜うらうらく此月うらに
 よし野辺は出て稲葉露よ
 うるむい稲の穂の出て青く
 て風にそよぐけき遠く
 のぞめハ平々として面白

破		軍		方		向	
夜九ツ	戌の方	夜八ツ	亥の方	夜七ツ	子の方	夜六ツ	丑の方
朝六ツ	寅の方	朝五ツ	卯の方	朝四ツ	辰の方	朝三ツ	巳の方
昼九ツ	未の方	昼八ツ	申の方	昼七ツ	酉の方	昼六ツ	戌の方
暮六ツ	未の方	夜五ツ	申の方	夜四ツ	酉の方	夜三ツ	戌の方

時刻 ○未日申日○未刻申刻事と
 必用也へうす

方角 ○家普請他行東北の
 方角よては南ハ太凶

天氣占候 卯の日三ツあれ
 稲よく熟す

月の内小畑あまバ米ととめ
 野菜もせもろーか

衣服式 帷子を着るは當月
 の式之袴ハ鶉色なり

萩重 表はむすま
 裏薄紫 花薄 白

裏うすをれいろなり
 上つゝに右の色を召うなり

女衣服 白帷子を着るは式
 なる上臈ハ白あげの

かこびるに根の葉あつひ草
 のこやうまこハ萩萩をどに
 洗ものうたるとりやうにさむる

養生 夜漸くひやりなり
 衣を厚くし涼風よ

やあつらう華なる夏の間ハ
 膝理のけ表氣をすくして

風ハ感トやと或ハ感冒傷
 寒痰嗽喘急の病やるなり

慎んてこれをさくべし
 ○此北のすひの根ととくやび
 刻とせんと凍疥を洗をよし

飲食

七月一ヶ月の食物の類あらえ出す

焼米

糯米、青稻を炊り、確を搗き簸す

籾を去色バ米ひらたくさし、味其美きなり、糯米より味

劣なり、蜻蛉日記「やいこめとあり、非焼米やきんてまらちの疎雨更

切麥

△ゆる麦△あつむき。ひやむき、夏も出ず、六月も出ず

○ひや麦いあへいなる物うい、まらち詳るま今いほえ

の細き温飽とち中喰ふと、つり又ゆる麦の冷るさつか

ぶと、あつ麦の煮てあつさ、とつり職人哥合ふ

○ひやあけのせら月とるもの、ひやあけの瀬戸の備前国より

○切麦やあけはる脂の上蓮二

七月飲食 並 料理献立

禁 雁肉 思邈云此月食へ神物を破る 又礼記此月食へ

余益あつて、○蓴菜 李延云七月、蟲多く著く此を食へ、霍乱やむ

好 胡麻を食へ、すく内を、潤す守り、養生論又出さる

理 汁、ほろ鴨、めうど

あち、やんぱん、ねあ、ゆの皮

清汁、いんぴんすこ、あつたさ

あち、やんぱん、ねあ、ゆの皮

膾、あつたさ

あち、やんぱん、ねあ、ゆの皮

こひせし
しやうがけ

いまいごう
かたけりゆ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

和會物

あつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

吸物

あつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

精進汁

あつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

生かつかうぜ
あつしよ

たつしよ
あつしよ

清汁

あつしよ
あつしよ

差味

白うり

大こんどいさ
あむらひ

菊の葉あざみ

あざみ・まろを
あざみ

さくらびかんたん

いとこんややく
うらみぞうけん
こりせりあひ

煮物

葉付あし

土佐ふ
ふきんぼ

かしん丸あま

新山いも・き豆
あま

根いも

志免あま

せんま
あま

和會物

きんさん・あま豆
あま

どいき

洋新あま

きんさん
あま

あけふ

あま

あま

くら・木くさげ
あま

桜を堂

日本歳時記拾遺

全三冊

先年貝原先生作の日本歳時記全冊
賣却中い在家の記並に月令博物全
書不刊しるるが故に記し家時記
拾遺と号し中い土用の夕暮月
節分等のこと雅俗の好尚を加へも
あろく記し能登の傍りとす

博物筌

小本

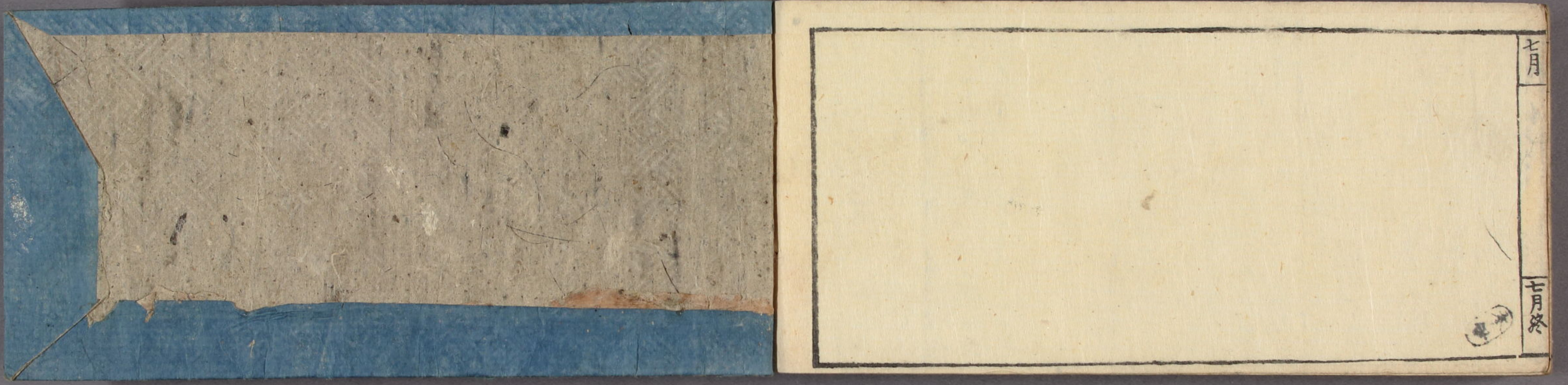
合本一冊

此本の神社佛閣人物草木魚鳥を以て
天地の間の多岐なりけり新くこの
ある守りよまもいハ分はて①の部と
れハ天の鳥ハ電。猪子。神のみハ後
大津宮。出雲大社。人のタハ医者ハ
一休の約状を以て本要なるゆへに
小本一冊神社の神新事秘故すホ
あり悉く記しとのと

神佛祭礼記

小本一冊

日本年中神社の祭礼佛家の縁日
の陳述を以て故す來歴とありす
不刊の法入す



七月

七月終



